# 花の名は

みなみ由佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
花の名は

【Ｎコード】
Ｎ３７０１Ｒ

【作者名】
みなみ由佳

【あらすじ】
花の名を持つ青年の子孫と、龍王の力で長きに渡り繁栄した慶桜国はたったひとりの男の反乱によって脆くも崩れ去った。葵家の姫、葵鮮花はかつて慶桜国を治めていた笙家ただひとりの生き残り。そんな鮮花の前に現れた「次代龍王」を名乗る青年、そして舞い込む慶桜国王からの縁談……　運命に翻弄された、花の名を持つ姫の物語。中華風ファンタジー。

## 登場人物（九月二十四日　更新）

◆葵鮮花（き・せんか）／千花姫（せんかひめ）
年齢は十七歳。かつて慶桜国を治めていた笙（しょう）家直系の生き残り。
黒い髪と緋色の瞳を持つ。
母親の実家であった葵（き）家に従者の誓牙（せいが）と共に身を寄せている。
元公女という身分であるからか一本筋の通った強い少女。
笙家直系長姫ということ、そして公女としてのプライドは捨てていない。
少々お転婆、悪く言えばじゃじゃ馬。
笙王家復活は特に望んでおらず、ただ静かに暮らしてゆければいいという考えを持つ。

◆蒼龍黎（あおい・りゅうれい）
年齢は二十歳前後。笙家に仕える龍王。
蒼い髪と鳶色の瞳を持つ。
鮮花がたまたま見つけた龍脈で呼び出された。
普段は人間の姿を取っているが、龍の姿になると青龍の形を取る。
何千年という長い時間を生きる龍のため、本人曰く「まだまだ生まれたて」。
性格はどこまでも穏やかでマイペース。少々天然ボケ気味。
純真無垢という言葉が一番似合う。

◆皇瑛劉（こう・えいりゅう）
年齢は二十一歳。慶桜国当代国王。
赤黒い髪と赤い瞳を持つ。
皇家の王としては二代目にあたり、彼の父親が笙家を滅ぼした。
傲慢不遜でいわゆる俺様な性格だが、政治的手腕は一流のもので、
真実を見極めることに長ける。

隣国・シルキアードのものを好み、普段の服装はどちらかと言えば洋装に近い。
また異国語にも通じている。

◆菖誓牙（しょう・せいが）
年齢は二十七歳。葵家家人で自称・鮮花の従者。
菫色の髪と焦げ茶色の瞳を持つ。
年齢にそぐわぬ外見を持ち、余裕で五つは年齢の鯖を読める（本人談）。
いわゆる美男子。しかし結構腹黒い。
かつては王宮に仕える武官だったが、十年前の反乱の際、幼い千花姫を連れて逃走。
千花姫の母、白百合の君の実家であった葵家に千花姫と共に身を寄せる。
自他共に認める鮮花馬鹿。鮮花のことになると何も見えなくなる。
類稀なる剣術の達人でもある。

◆杜李鴻（と・りこう）
年齢は三十二歳。慶桜国国王・皇瑛劉の側近。
灰色の髪を持ち、目は狐のように細められている。
「いや、～」が口癖の温厚な青年で幼い頃から瑛劉に手を焼かされている苦労性。
しかし瑛劉の為ならば手段を選ばない節もあり、彼の為なら憎まれ役も買って出る。

◆シンディ
年齢は二十八歳。後宮の筆頭女官。
金色の髪に茶色の瞳を持つ。
慶桜国の生まれではなく隣国・シルキアードの生まれ。
度々シルキアードの言葉を使い鮮花を困らせる。

◆笙華治（しょう・かじ）
享年三十四歳。慶桜国元国王にして鮮花の父。
金髪蒼眼。母親がシルキアードの生まれだったため、このような容姿だった。
十六のときに国王の地位に就いたとされ、人望や政治的な才能は笙慶桜以来の逸材と言われていた。
また、生涯白百合の君以外の妻を娶らなかったことでも有名。
十年前、皇凱世によって殺害される。

◆白百合の君（しらゆりのきみ）
享年不明。笙華治の妻にして鮮花の母。
黒い髪に緋色の瞳を持つ。
葵家の生まれで現当主・葵彩憐の妹とされているがはっきりとはわかっておらず、また本名も不明なため多くが謎に包まれた女性。
離宮のひとつ、百合の宮に住んでいたことからこの呼び名がつけられたと言われている。
鮮花が五歳のとき原因不明の病で亡くなった。

◆皇凱世（こう・がいせい）
慶桜国前国王で瑛劉の父。
紺色の髪に赤い瞳を持つ。
十年前、笙家を滅ぼし王権を握ったものの、二年前突然亡くなる。

◆笙慶桜（しょう・けいおう）
慶桜国初代国王。
荒れに荒れ果てていた小国を救った英雄として慶桜国では彼にまつ

わる伝説が語り継がれている。
中でも龍王に関する伝説は有名。
元は旅の医官で、医者にも関わらず剣術の達人だったらしい。

# 序章　（一）

昔々、あるところにひとりの青年がいました。
青年はあちこち旅をして回っていました。
それは宛てもない旅。
ただただ気の赴くままに、青年は歩いていました。

青年が訪ねる先のどこを見ても干からびた大地と、餓えた人々ばかりでした。
ある時これに憂いた青年は人々を率い立ち上がりました。
目指すは私利私欲のままに悪政をはたらく王と、利権に目がくらみ王に媚び諂う官吏。

そんな青年を見て、この大地を静かに守っていた龍王も青年に手を貸しました。
青年と人々、そして龍王は間もなく王を倒し、新たな国を作りました。

龍王は誓いました。
「貴公の子孫が途絶えるまで、我は貴公とその子孫に仕えよう」と。

青年は自らの国のどこかに祠を作り、そこに龍王を祀りました。
いつからかそこは龍脈と呼ばれ、最も龍の力が強く出る地となりました。

それからずっと、この国は花の名を持つ青年の子孫と、龍に守られていると、言い伝えられています――

――その青年、名を笙慶桜(しょう・けいおう)。

慶桜国(けいおうこく)、初代国王也。

# 序章　（二）

「早く、こっちだ！」

鮮明に残っている記憶は何か、と問われると、私は間違いなくこう答える。

赤の炎と何かが焼けた匂い、逃げ回る人々の悲鳴、真夏かと錯覚するほどの熱さ、そして小さな自分の手を必死で引く兄だと。

――十年前、慶桜国（けいおうこく）。

花の名を持つ青年の子孫と龍王の力によって治められていた国は、たったひとりの男の反乱によって脆くも崩れ去った。

皇凱世（こう・がいせい）。

慶桜国の王、笙華治（しょう・かじ）の右腕とも言われる臣下だった。

（このままじゃあたし、しんじゃう……！）

七つになったばかりだった千花姫（せんかひめ）は幼心にそう思った。

王族の末姫とはいえ、命を狙われる立場にあると言い聞かせられてきた千花姫はただただ末の兄公子に手を引かれて逃げた。

「良いか千花、私が戻って来るまでここに隠れておくんだ」

末の兄公子は千花姫を厨の引き戸の中に押し込めた。

中は少しだけ暑いし、引き戸も熱い。もう火の手がこの離宮の近くまで来ているのだろう。

「……あにうえ、せんかもたたかえます。せんかはもうななつです」

「ならぬのだ、千花……案ずるな。私も他の兄上たちもすぐに戻ってくる。大人しくしていなさい」

「あにうえっ、あにうえ！！」

千花姫の叫びも空しく、末の兄公子は元来た道を速足で戻って行った。

残されたのは、幼い千花姫ただひとり。

（きっと、あにうえはもどってこない）

千花姫はそう感じていた。

ここに来るまでに見てきた人はみんな倒れ死んでいた。

顔を知った武官もいる、優しくしてくれた文官もいる、たくさん世話をしてくれた女官だっている。

末の兄公子によって離宮から連れ出されたとき、すでに長兄は殺されたあとだった。

直接その場面を見たわけではないし、はっきりと告げられたわけでもない。

末の兄公子と他の武官との間で交わされた僅かな会話から賢い千花姫はそのことを悟ったのだった。

三人いる兄の、一人が死んだ。

ならばあとの二人が反乱軍の手にかけられるのも時間の問題だ。

父親である国王だって殺されてしまっているに違いない。

そしてそのうちここに隠れている自分も見つかって、殺されてしまう。

そう考えるとひゅっと、喉の奥が鳴る。

恐怖から逃れるように握った両手は小さく、そして震えていた。
狭い引き戸の中で、千花姫はぎゅっと縮こまった。

「ははうえぇ……」

女官たちの悲鳴と、轟々と燃え盛る炎の音を聞きながら、祈るように亡くなった母の名を呟いた。

どのくらいそうしていただろう。
外から聞こえる音は先ほどとは打って変わり、ただただ反乱軍と思しき武官の怒声が響くばかりだ。
かたりと、誰かが厨に入ってくる気配がした。

（なに……？　てき？）

兄公子だろうか。
いや、もしそうだとしたら真っ先に飛び込んでくるに違いないが、この足音はゆっくりと引き戸に近づいてくるではないか。
兄公子では、ない。

（いやだ、こないで！）

そう願っても、足音はだんだんこちらへと近づいてくる。
刹那、引き戸ががらりと開けられて外の光と炎の熱と、焦げた匂いが入ってくる。
そのあまりの熱風と異臭に再び恐怖を煽られ、千花姫はしっかりと、

目を瞑った。

「……やっと見つけた！」

しかしいつまで経っても千花姫を引きずり出すどころか、刺し殺す気配もない。

それどころか何やら呑気な声がしたような気がする。

そっと、千花姫は目を開けた。

「あ、生きてた！　よかったあ……死んでるのかと思ったよ、僕」

「だれ……？」

「僕は、君を助けに来たんだ」

飛び込んできたのは、その場に似つかわしくないくらいの笑顔と鮮やかな青。

周囲が炎の色で赤いからか余計にその色の髪は目立った。

年の頃は千花姫より少し上くらいだろうか。

この戦禍と炎の中ここまでやってきたはずなのに、彼の身体に返り血はおろか、煤さえもついていなかった。

するとその時、外から数人の武官と思しき声が聞こえた。

王には公女がいたはずだ、あとはこの離宮だけだ、絶対にいるはずだ探せ、云々。

公女という単語が自分を指すものだと気づき、千花姫はいっそう身を固くした。

「もう時間がないか……ほら、早く逃げよう！」

「え、でもあにうえがここでまっていてって……」

「でも逃げないと、君が死ぬ」

「死」という単語に千花姫の肩が跳ねた。

少年は言葉の選択を間違えたかと、一瞬逡巡したが今はそれどころではないと思い直した。
とにかく早く千花姫をこの場から救い出さなければならない。
たとえそれが、少々手荒な方法でも。

「……ごめんね」
「え？　きゃあっ！！」

少年は素早く千花姫を引き戸の中から引きずり出したかと思うと、そのまま荷物でも抱えるかのように肩に担ぎ部屋を飛び出した。
その間、わずか数秒。
千花姫に抵抗の隙さえ与えず、されるがままに少年に連れ出されてしまった。

「ちょっと、はなしなさい！　わたしを誰だと思ってるの！」
「慶桜国の第一公女、笙千花姫」
「こたえなくていいの！　とにかくおろしなさ……っ！」

なんの前触れもなくすとん、と降ろされ、突然のことに驚いた千花姫は均衡を崩しかけたがすぐ何事もなかったかのように青い髪の少年を見据えた。
見据えた、と言っても少年のほうが身長が高かったので見上げる形になってしまったが。

「きゅうにおろさないで！　こけてけがでもしたらどうするの！」
「君が降ろしてくれ、って言ったんだよ」

そう言われるとぐうの音も出ない。
そんな千花姫を無視し「それに」と少年は続けた。

「君を呼んでる人がいる」

誰が、と問い返す間もなくどこからか千花様、千花様と自分の名を繰り返し呼ぶ声が聞こえる。
すると少年はすっと目の前に広がる、王宮へと繋がる大回廊を指差した。

「僕の役目はここで終わり。さあ千花、あの回廊を渡ったら君は助かる」
「でもあなたは、」

どうなるの、という問いは声となって出る前に掻き消えた。
何故かそう問えばもう二度と彼に会えないような気がしたのだ。
今度はちゃんとそれを察したのか少年はふわりと笑い、

「僕は大丈夫。君を大切な人のところへ送り届けたら僕もここを出られるから」

と続け、千花姫の小さな背中を押した。

「回廊を渡り終えるまで絶対に振り向いてはいけないよ」

少年のその声を聞き、千花姫は大回廊を走り出した。
途中背後で何度か追っ手の武官の叫び声が聞こえたが、次の瞬間それは悲鳴にかわっていき、その度に千花姫は振り返りたい衝動にかられたが、少年との約束だとぐっとこらえ、無事王宮側の回廊へとたどり着いた。
するとぬっと、回廊の柱から人影が現れた。

「千花様！」

「っ！　……せいが！！」

人影は幼い千花姫が信頼を寄せる家臣のひとり――菖誓牙（しょう・せいが）だった。
実の兄のように慕う誓牙を前にしてこれまでの緊張が解けたのか、
彼に抱きついた瞬間千花姫の涙腺が決壊した。
公女とはいえ、七つになったばかりの子供に今まで起こったことが
どれほど衝撃的だったことかと思うと誓牙は無力な自分を恥じ、自
身の唇を強く噛み、幼い身体を抱きしめた。
もう、千花様はひとりじゃないという、思いもこめて。

「それより千花様、一刻も早くここを脱出しましょう。もう我々の
味方となるような者は……」
「せいが……そうだね」

誓牙が身体を離して千花姫の小さな手を握ったとき、ふと彼女は今
走ってきた大回廊を振り返った。
大回廊の先には確かにさっき自分を助けてくれた青い髪の少年がい
て、追っ手だっていたはずなのにそこには最初から誰もいなかった
かのように、何の痕跡も残っていなかった。

「千花様、」

どうして、と疑問に思う間もなく誓牙に手をひかれ、王宮を走り抜
けた。

鮮明に残っている記憶は何時のことだ、と問われれば、私はこう答えるしかない。

――笙慶桜の時代から何百年と続いた笙王家が終焉を迎えた、その日のことだと。

## 花と龍と誓いの口づけ　（一）

――十年後、慶桜国王都・華渓（かけい）。

国の心臓部分とも言える慶桜国一華やかで栄える都の中心にある王宮の一室で、室内にも関わらず外套を纏った青年が窓からそこを見下ろしていた。

肩に垂れる三つに編んだ赤黒い髪を、風が揺らす。

皇瑛劉（こう・えいりゅう）。

笙王家を滅ぼした皇凱世（こう・がいせい）の息子であり、現在の慶桜国国王だ。

褐色の端正な顔に浮かべる表情はどこか憂いを帯び、しかし赤い瞳に宿る光は強い意志を持っていて、その差がまた部屋の前を通り過ぎる若い女官たちの視線を集めていた。

不意にぱたぱたとこちらへ近づく足音が聞こえたかと思うと、数冊の本を重たそうに抱えた長身痩躯の男がひょこっと顔を出した。

「瑛劉様！　探しましたよ、いやもう何やってるんですか……」

「李鴻（りこう）、ちょうど良いところへ来た。貴様はこの国をどう思う」

「は？　と、申しますと……？」

何の脈絡もなく問われ一瞬本気でわからない、と言うように首を傾げた李鴻だったが、すぐ瑛劉の意図をくみ取り答えた。

瑛劉の急な問いには、もう慣れている。

「華渓のみに関して言えば、民たちの生活も経済もそれなりに安定しているように思われますが」

「そうか」
「では、瑛劉様はどうお考えで？」
「……慶桜国は腐り始めている」

瑛劉の眼下に広がる華渓の都からはそんなことなど一切感じ取られない。
むしろ李鴻が言ったように、何もかもが安定している。
しかし、瑛劉は国を侵食し始める闇に気が付いていた。
まず華渓以外の町で取れる作物が育たなくなり始めていること、そして他国との国境付近の村で流行り始めている謎の病。
議会の老人たちはそんなことに目も留めず、ただただ自分たちの利益になるようなことしか話を進めない。
民のことなど、まるで眼中にないように。
だからと言って議会を通さなければ資金面や軍事面での協力も得られない。
あの官吏たちは皇家が政権を握ったことだけで満足して、慶桜国のことを考えないのか。
若き国王の目下の悩みはその二つだった。

「民の生活に関しては議会で支援法なりなんなり成立させればいくらでも手助け出来る。しかし災害と疫病に関しては俺たちには何も出来ん。対策を考えたくても原因すらわからんのだ」
「そうですね……議会でそれを話題にしたところで、官吏たちがそれに食いついてくるか……」
「ところで李鴻。俺に何か用があって来たんじゃないのか？」
「いや、瑛劉様が以前探されていた本を見つけましたので」

すると李鴻は抱えていた数冊の分厚い本を手渡した。
その本の全ては慶桜国の成立から起こった出来事を事細かく記した歴史書だ。

「しかし瑛劉様、歴史書などお読みになってどうされるつもりで？」
「慶桜国はそれなりに歴史が長い。今と似たような事象が昔なかったとは言い切れないからな……ん？」

それまで適当に本を漁っていた瑛劉の手がとある一冊の本で止まった。
他の本とは違いさほど分厚くもなく、古くもない本だ。
本を開いて発行者を見てみたら瑛劉も知っている文官で、民間に浸透しているお伽噺を編纂したいわゆる民話集のようなものだった。

「……おい、俺は民話を持って来いなど一言も命令していないぞ」
「申し訳ありません。後で書庫管理の者に伝えておきますので」
「フン……まあいい。それは置いておけ」
「いや、しかし……」
「たまには民話を読むのも良いと思ってな。小難しい史書漁りに疲れたらそれを読む」

珍しい、と李鴻は目を見張った。
李鴻は瑛劉が幼い頃から側近としてずっと傍にいるが、瑛劉が読む本と言えば兵法書ばかりという非常に子供らしくない子供だったことを覚えている。
今思うとそれは父親の影響もあったのだろうが、当時の李鴻にしてみれば他の貴族の子弟と同じように瑛劉にも政治や戦略以外の教養も身に着けて欲しかったものだ。
故に、民話やお伽噺の類は瑛劉自ら避けていたのだった。
しばらく瑛劉は何冊かの本を手に取り、役に立たなさそうな本を李鴻に手渡した。
瑛劉は何も言わなかったが恐らく書庫へ戻して来い、という意味だろう。

李鴻も王の側近としての仕事が山積みで正直こんなことしている場合ではなかったが、瑛劉の人使いの荒さは今に始まったことではないので特に何も言わなかった。
本の選別が終わり、ああこれで仕事に戻れる、と李鴻が思ったとき、ふと瑛劉の目が細められた。

「……蝋梅の宮（ろうばいのみや）のほうはどうなっている」

蝋梅の宮。
離宮のうちのひとつを表すその言葉に、自然と李鴻の背筋も伸びた。

「警吏の者からは特に変化はないと。変わったことと言えば、後宮の女官が面会を申し入れたくらいで」
「面会は徹底的に謝絶しろ。たとえ王宮の者だったとしてもだ。奴と接触するのも最低限の人数に抑えろ」
「御意に」

短くそれだけ返事をすると、李鴻は来たときと同じように重たそうに本を抱えて出て行った。
そろそろ政務に戻るかと思ったとき、そういえば先ほど李鴻が持ってきた歴史書のほぼ全てに「龍王」なる存在について書かれていたと思い出した。
瑛劉は現実主義者である。
笙慶桜が龍王の力を借りて慶桜国を作ったとは思っていないし、ましてや龍王の存在自体についても半信半疑なのだ。
歴代の王の傍に必ず龍王がいたかと聞かれてもそうでもないとしか言いようがない。
事実、三代前の王、笙梅狼（しょう・ばいろう）にはそれらしき存在がいなかったと聞く。
しかしどの歴史書にも龍王の存在について触れているのだ。
それが笙家の者にしか呼び出せないことも、笙家の者にしか力を貸

さないことも。

「龍王、か……フッ、そんな存在が助けてくれるなら俺は最初からそれに頼っている」

しかし笙家の者は十年前に瑛劉の父、凱世が末席にいたるまで根絶やしにしたのだ。

だからなんとかして自分の力で道を切り開くしかないと、瑛劉は外套を翻し、部屋を後にした。

## 花と龍と誓いの口づけ　（二）

「うん！　いい買い物したわ！」
「鮮花（せんか）様、お荷物少しお持ちしましょうか？」
「これくらい大丈夫。誓牙（せいが）だっていっぱい持ってるし」

華渓の中で最も活気溢れる市場。
絹のように美しい黒髪を高い位置でひとつに纏め、前に大きく切れ目の入った膝くらいまである薄い黄色の衣と、その下に青い膝上ほどの現代で言うキュロットのようなものを纏う少女。
そしてその一歩後ろを歩く腰に長剣をさした菫の髪の細身の青年が、はた目から見ても異常な量の荷物を抱えて大通りを闊歩していた。
道行く人々はすれ違う彼らを一度は振り返る。
理由としては少女の活発そうに見える中に気高さや気品のようなものが溢れだしていること、そして青年の儚げな美しさ、その二つが一部の通行人の視線を集めているのだが……
それはほんの一部だけで、大抵の人はやはり荷物の多さに驚き振り返るのだ。
ちなみにそんな少女と青年が買ったものは布に始まり食料品やら筆やら何やら。

「鮮花様の見立ては正解でしたね。やっぱり西の市より東の市のほうが賑わっている」
「近所のおばさんの情報よ。西の市は最近物価が高いから、東の市のほうが安くてしっかりしたものが買えてしかも場合によっちゃまけてくれるって！」
……やけに所帯染みた会話ではあるが。

そんな二人――鮮花と誓牙が実は貴族の令嬢とその従者だなんて、言われても信じない人のほうが多いかもしれない。
ちょっと高価な衣を身にまとう年頃の娘と律儀で丁寧な兄、程度にしか映らないだろう。
しかし、鮮花のほうはただの貴族の娘などではない。

十年前に滅びた笙王家の末公女、千花姫その人なのだ。

十年前、誓牙に連れられて王宮を脱出できた千花姫は亡くなった母親、白百合の君（しらゆりのきみ）の生家である葵（き）家に身を寄せることとなった。
葵家の者は千花姫と誓牙を温かく迎え、皇家の刺客から匿ってくれることにも協力してくれた。

千花姫が鮮花と名を変えたのもちょうどその頃だ。
千花という名が幼名だったことや、刺客をかく乱する目的で誓牙がその名をつけた。
鮮やかな色を持つ花は強く逞しく育つ。
だからこの幼い姫も、何にも負けずに強い美しく鮮やかな花のような女性になってほしい。
誓牙がそう願った日から幼い千花姫は葵鮮花（き・せんか）として生きることになった。

しかし、問題は刺客だけではなかった。
元々葵家はそう大きい貴族の家ではない。
貴妃となった白百合の君がいたからこそ、大貴族と同等の暮らしが出来ていたのだ。
そして白百合の君亡き後、葵家はとんでもない速さで没落。
生活費と使用人たちの人件費に困り果て、現在の葵家当主である鮮

花の叔母は使用人のほとんどを解雇。
貴重な働き手となった誓牙は大貴族が持つ倉庫の門番を始め、鮮花も近くの店で売り子として働き始めた。
なんと強かで逞しい元公女なんだろう。
そうして葵家はかろうじて貴族としての地位は保っているものの、生活は一般庶民のそれとほとんど変わらないものだった。

「そうだわ！　ねえ誓牙、ちょっとお願いがあるんだけど……」
「は、なんでしょうか？」
「厨の天井の板が腐って雨漏りしてるの。時間があるときに修理して欲しいなあ、って」
「お安い御用です。次の休日にでも直しておきましょう」

前言撤回。
一般庶民より酷い生活をしているかもしれない。

「あ、それとね、この前叔母さんが、……」

――しゃらん

「……何？」
「鮮花様？」
「ねえ誓牙、今鈴の音が聞こえなかった？」
「……いえ、私には何も」

――しゃらん、しゃらん、しゃらん

「っ、また……」

まるで鮮花に何かを訴えかけるようにずっと頭の中で鳴り響く。

しゃらん。しゃらん。しゃらん。しゃらん。

「ごめん誓牙！　先に帰ってて！」

「ちょっと、鮮花様！？」

鮮花はそれに耐えかねて持っていた荷物を全て誓牙に押し付け音のするほうへと走り出した。

さすがの誓牙も荷物の量によろけていたが、そんなことに構っている暇はない。

鈴の音が、鮮花にはとても悲しそうに聞こえたから。

必死で自分を呼んでいるような気がして鮮花の足は自然と速くなった。

（あれ？　でも確かこっちって……）

ふと足を止めて辺りを見渡す。

市場からは離れ、道の両側は白い塀がそびえ立っている。

人通りは少なく時折すれ違うものと言えば、貴族や官吏が乗っているであろう牛車。

（こっちは確か、王宮のほう……）

鮮花は一瞬、その場に固まった。

みだりに王宮へ近づいてはならない、という叔母や誓牙の忠告を思い出したからだ。

死んだはずの千花姫が生きていると知られればきっと、いや必ず殺される。

そう葛藤する間にも鈴の音は絶えず響き続ける。

「もう、どうにでもなれ！！」

ええい、ままよ！とでも言うように鮮花はまた走り出した。
王宮の人間に自分が千花姫だとわからなければいい、だったらさっさと走り抜ければいい。
考えは短絡的だったが今の鮮花にはそれしか方法がなかった。

＊　＊　＊

「ここは……」

鮮花がたどり着いたのは王宮の近くにある山だった。
千花姫として生きていた頃、誓牙や兄たちと何度か来たことのある山だったからかそれほど迷わず登ることが出来た。
その山の中腹で鮮花が見つけたのは木に隠されるようにある洞窟だった。
幼い頃何度も通った道なのに、こんなところにひっそりと洞窟があるなんて知らなかった。

――しゃらん

鈴の音は、この奥から聞こえてくる。
意を決して鮮花は洞窟に足を踏み入れた。
入口そのものが木や葉に隠されるようにしているため中は暗いとばかり思っていたが、何故か目がよくきき、しかもそこに入ったのは初めてなのにまるで馴染んだ場所のように迷うことなく進んでいった。

しばらく進むと、急に開けた場所に出た。
小部屋というにはあまりにも大きすぎるそこは、低かった天井が嘘のように高く吹き抜け、見上げるとぽっかりと大きな穴が開いていてそこから鬱蒼と茂る森と空が見えた。
ふわり、と薄い黄色の衣の下に穿いていた青い衣服を揺らす。
ふとその先を見てみると、ちょろちょろと流れる清水に守られるようにして小祠があった。
近づくと、それは思ったよりも小さかったがどこか厳かな雰囲気を放っていた。

「っ、ぁっ……！！」

その刹那、鮮花に頭痛が走る。

『我ヲ、解放セヨ』
「ッ……誰！？」
『我コソガ龍王。此ノ大地ヲ守リシ者』
「りゅう、おう……？」

聞き覚えがあった。
かつて笙慶桜と共にこの地に慶桜国を作った彼の親友、龍の王、大地の守り神。
正当な笙家の者にしか召喚出来ない、それ。

『祠ヲ開ケ、サスレバ我ハ汝ト国ノ力ト相成ロウ』
「そんなっ、こと、」

出来ない、鮮花はそう思っていた。
龍王を召喚するということは慶桜国の次期国王として龍と、そしてこの大地に認められたことと同義。

しかし鮮花はどうだ。
もうすでに政権は皇家に移っている上に、鮮花に笙家復興の意思はない。
こんなところで龍王を呼び出してしまえば争いの火種になることは確実だった。
……でも。

――しゃらん、しゃらん

（どうして鈴の音は鳴りやまないの！？）

先ほどよりも強く、大きく、頭の中を駆けるそれはまるで鮮花に召喚を促しているようで。

（私はどうしたら……）

――しゃらん、しゃらん、しゃら……

『お願い、僕を呼んで』
「え……？」

鈴の音が鳴りやんだかと思うと、代わりに流れ込んできたのは人の声。

「誰なの？」
『僕は、ああっ！　ッは……』
「何！？」
『早ク、開クノダ、小娘！！』

――しゃらん

（……そっか、これは……）

鈴の音は、龍王が苦しむ声。
何かからの支配に必死で抗う声。
それに何故か鮮花には今しがた聞こえた人の声が懐かしく感じられた。
久しぶりに会う友人のような、それは――

「……待ってて。私が今、助けるから」

鮮花にはもう、迷いなどなかった。
龍王を呼び出したことが露見して争いが起こるなら、呼び出したことが露見しなければいい。
祠の扉に手をかけ、一気にそれを開け放した。

## 花と龍と誓いの口づけ　（三）

思いっきり祠の扉を開け放した瞬間、周囲の風が渦を巻く。

「きゃっ！！」

そのあまりの風の強さに小柄な鮮花は飛ばされそうになったが、なんとか足を踏ん張って耐えた。
衣服の裾が靡く。

（何が起こるの……？）

そのうち風は竜巻のようにひとつの渦を作り、みるみるうちに何かを形取っていく。
竜巻の中から現れた大きなそれは――青い、龍だった。

「あなたは……」

『そう、僕は龍王。この大地を静かに見守る者』

声は龍王から発せられるものではなく直接鮮花の頭の中に流れ込んでくるようだった。

「あなたが、龍王」

『ありがとう、笙鮮花。僕を目覚めさせてくれて』

そっと、鮮花が手をのばすと龍王は嬉しそうに目を細めた。
すると眩いばかりの光が迸り鮮花は思わずぎゅっと目を閉じた。
しかし次の瞬間感じる、唇への違和感。

（……へ？　何？）

光が収まり、恐る恐る鮮花が目を開けるとそこには超拡大された、端正な顔。

顔、と言うより閉じた瞳が見えていると言ったほうが良いのか。

一瞬思考回路が停止し、超拡大された顔と唇への違和感の意味を理解したとき、鮮花の顔はみるみるうちに赤に染まった。

「〜〜〜〜〜〜〜ッ！！」

どん、とありったけの力で男の胸板を押し返すとやっとそれは離れた。

きっ、と鮮花が前を見据えると、そこには青い髪の男が立っていた。

襟足はやや長く、あまりこの時代にあわない髪型だ。

背は鮮花より頭ふたつ分ほど高く、穏やかそうな瞳は鳶色をしている。

纏う雰囲気は高貴な、まるで王族のそれでしかしながらどこか温和な感じもする。

「なななななっ、何するの！！」

「何って、接ぷ……」

「それ以上言わなくっていい！！」

きょとん、とした男は自分のしでかしたことが何もわかっていないのか。

鮮花は怒りたいやら恥ずかしいやらで、この行き場のなさすぎる気持ちをどこにやっていいのかわからなかった。

（初めて、だったのに……）

女子ならば誰もが初めての口づけには夢を見るものだ。
庶民派元公女の鮮花も例外に非ず。
まさかこんな夢も希望もない形で終わらせるなんて想像や計画のうちには入っていなかった。
そこではたと、鮮花は気づく。

「……あれ？　龍王様は？」

確かに先ほどまで風に包まれて青い龍がいたはずなのだ。
しかしこれまた目の前の男は鮮花すら予想しない変化球を投げた。

「え、僕が龍王だけど」

ぴたり。
洞窟の空気の流れが、止まった気がした。

「え？　……は、はあああああああ！？」

鮮花の叫び声は祠どころか山全体に響き渡った。
ちょうど祠の天井に開いた大きな穴の上を「あほー、あほー」と鴉が啼きながら飛んで行った。

＊　＊　＊

穴があったら入りたい、否、墓穴があったらさっさとそこに入って地中深くまで埋めて欲しい。

言葉としてはものすごく間違っている気がしたが、鮮花の気持ちを的確に表せる言葉はまさにそれしかなかった。
龍王といえば笙慶桜と共に大地を平定し見守り、時には人間に天誅さえ下す「神」だと、王族のみならず慶桜国の人間は子供の頃からそう教えられる。
つまり畏敬の念を持って国民から称えられる存在、のはずなのに。
しかし目の前にいるへらりと笑う、自らを龍王と名乗る者はどうだろう。
――言っちゃあ悪いが、鮮花の想像する龍王像とはとても似つかない。
と、言うより。

（わ、私は龍王様に何した！？）

すごい力で押し返した気もするし、暴言だって吐いた気がする。
さああっと顔から血が引いて、赤かった顔が急に青くなる。
本来なら龍王に口づけられるなんてすごく光栄なことなんじゃないのか。
ひょっとしたら自分はこのまま龍王に殺されてしまうんじゃないだろうか。

「赤くなったり青くなったり、鮮花って面白いんだねー」
（誰のせいだと思ってるんですか！！）

しかしぶち切れる様子もなく、相変わらずへらりとした笑顔を浮かべた龍王はそんなことを言ってのける。
鮮花の突っ込みはなんとか声にならずに飲み込めた。
……これ以上何か言うと、不敬以外の何物でもない。
それに加え、へらへらとした中にもある圧倒的な存在感。

「――龍王、様」

目の前に龍王がいる、それだけで気圧されていた鮮花がようやく紡げた言葉がそれだった。

「鮮花、僕に何か質問、あるでしょ？」

「……本当にあなたは龍王様なんですか」

意識したつもりはないのに、どこか不貞腐れたような声になってしまった。

さっきあんなことがあったんだから仕方ない。

「僕が龍王だ、ってことに納得してない顔だね」

「誰でもそう思いますよ！　だって聞いたことのある話とは全然違うし、龍じゃなくて人間だし……」

「んー、まあそうなるよね。僕は人間が知ってる『笙慶桜と共に国を創った龍王』じゃないし」

「……は？」

「かいつまんで言うとあれは僕から数えて百二十三代前の龍王かな」

なんだか今すごい「かみんぐあうと」を聞いた気がする。

つまりなんだ、慶桜国の国王と同じように龍王も代替わりしてる、と。

「それに僕の本当の姿は龍だけど、いつもあんな姿じゃ外出歩けないでしょ？　今の僕のこの人間の姿は世を忍ぶ仮の姿ってところかな」

でも慣れないから変な感じするけどね、と龍王はへらりと笑い手と足をぶるぶると振った。

質問した当人の鮮花はぽかんとするばかりである。
そんな軽々しく答えて良いものなのか。
頭が痛くなってきた。

「……じゃあ、ここはどこなんですか」
「ここはね、『龍脈』と呼ばれる洞窟なんだよ」

龍脈。
かつて笙慶桜が龍王を呼び出し、後に祀った場所。
鮮花は幼い頃に母親からそう教えられた記憶がある。
最も龍の力が強く出る場所だ、と。

「それにここは……」
「何をしているんですか、鮮花様」
「うわあっ！　……って、誓牙？」

ここにいるはずのない声を聞いて鮮花が振り向くといつの間にかそこには誓牙が立っていた。
もちろん、先ほど市場で買った荷物を全部持って。
あの後直接鮮花を追いかけて来たのだろう。
龍王を見ると、不思議そうな顔をして誓牙のことを見ていた。

「鮮花様、こちらの方は？」

聞き方は丁寧だったが、雰囲気は刺々しかった。
今の状態を誓牙からすると、大事な大事な姫がどこの誰とも知れない男に誑かされている、そのようにしか見えないのだろう。

「え……その、この人は……」

鮮花は龍王を紹介することに躊躇った。
はっきりと言って、歴代の国王のそばに龍王がいたと言う確たる証拠はない。
信仰心の強い慶桜国民だからこそ龍王の存在を信じているわけであって「龍王なんて伝説上の存在にすぎない」と言われればおしまいなのだ。
しかし出会ってまだ1時間も経たない龍王はやはり予想の少し斜め上を行く。

「僕は龍王。さっき、鮮花に呼び出されたんだ」

空気読めこのボケボケ龍王！
もうこの際不敬でもなんでもいい。
こっちの気遣いを無下にして！

「……鮮花様、本当なのですか」
「はあ……残念ながら本当よ。この人が龍王様」

誓牙は鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしてまじまじと龍王を見た。
今にも信じられないとでも叫びそうだ。
そりゃ誰も信じられない。
龍王といえば英雄的存在であって、決してこんなへらりと笑う柔い青年ではない。

「ああ、それと鮮花」
「……なんですか？」
「僕に敬語は使わないでね。君が僕を呼び出した時点で君と僕は友達。友達に敬語を使うなんてありえないでしょ？」
「じゃあ、あなたのことはなんて呼べばいいの？」

すると龍王はまたへらり、と笑う。
でもその笑顔はどこか懐かしいものを見ているようで。
「蒼龍黎（あおい・りゅうれい）。僕の名前。だから、龍黎（りゅうれい）って呼んで」

## 行間　回顧・龍黎

気がつくと、僕は泡のようなものの中にいた。
最初はなんとも思わなかったけど、だんだん煩わしくなってきて周りをこつこつと叩いてみても、割れたり壊れたりする気配もない。
自分が何者かもわからず、だからと言ってすることもなくじっと壁を見ていると僕はその壁の向こうを見ることが出来る力を持っていることに気付いた。
飛び込んできた風景はどこかの城か何かかな、とても立派な建物だった。
真ん中に大きな宮殿がひとつ、そして周りにいくつかの離宮。
そのうちにあるひとつの宮の部屋で、小さな女の子が寝台に横たわった女性の手を握って泣いていた。

「やだよぉっ……おかあさん……おかあさん！」

女の子に見覚えはない。
だけど……あの人は……

そこでふっと意識が途切れ次の瞬間、目を開けると……

――壁の向こうは、火の海だった。

逃げまどう女、泣き叫ぶ子供。
それらを容赦なく斬り捨てていく男ども。

別に斬られていく人と面識があるわけでもないのに何故か僕はとても悲しかった。

――王の友たちの終焉を見るのが悲しい。

それに気づいたとき、僕は悟った。

「ああ、僕は龍王なのだ」

と。

方々から火の手があがる王宮を見回していると気になる光景が目に入った。

謁見の間のような場所で恰幅の良い男が、金髪蒼眼の男の腹を剣で突き刺していた。

ゆっくりと剣を抜くと、男はゆっくりとその場に崩れ落ち、刺した男は勝ち誇ったように笑い部屋を去った。

刺した男が、首謀者か。

（……助けなくちゃ）

もし僕が本当に龍王なのだとしたら、彼を助けられるはず。

ここから出たい。

そう願うと、気がつけば僕は長く大きな回廊の中央に立っていた。

ふと自分の手を見ると五本の指があって、視線を下に向けると二本の足がある。

（僕、人間の姿をしてる）

慣れない人間の姿で一歩踏み出すごとに均衡が取れず、何度かこけそうになったけどそのうちだんだん慣れてきて回廊を抜ける頃には走れるようになっていた。
早く彼を助けなければ。
ただそれだけの気持ちで彼のもとへと急いだ。
でもやっと駆けつけた僕に、こと切れる寸前の彼はひゅうひゅうと息を出しながら笑ってこう言った。

「千花を助けてやってくれないか」

と。
僕の力があれば君は生き延びることが出来るのに、何故。

「それは千花が俺より大事な存在だからだよ」

千花を、頼む。
そう言って彼は死んだ。
ああ、彼は僕が何者かなんて名乗らなくても僕の正体を知っていたんだ。
大事な、存在。
金髪蒼眼の男――笙華治（しょう・かじ）の大事な存在。
それを見てみたい。
最初はそんな単純な興味だった。
だけど、離宮の厨の引き戸の中に隠れている君を見つけたとき、そんなことはどこかに吹き飛んだ。
小さく震える君が僕の主だと、本能で理解した。

――命をかけても、君を守りたい。

そう思ったんだ。
でも今の僕の力じゃ君を助けることも出来ないし、守ることも出来ない。
今出来ることといえば、君を殺そうと迫る追っ手を倒すくらい。
だからあの誓牙とかいう従者に君を託した。

十年経って君が僕を呼び出してくれたとき、小さな千花姫は鮮やかな花に成長してとても美しくて、まるで最初に見たあの女性のようで。
あれは母親だったのかな。
だったら華治似じゃなくて母親似だ。
また君に会えたことが嬉しくって口づけしたら顔を真っ赤にして怒ったよね。
あれはどうして？
今でもよくわからない。
まだ生まれたてで力も不十分だけど、これでやっと君を、鮮花を守れる。
僕はただ、それだけが嬉しかったんだ……――

でも、ひとつだけ気になるんだ。
龍脈のある洞窟は笙家直系の人間にしか存在を認識出来ないようにする結界が張ってあるんだ。
あそこは龍王の住処と言ってもいいからね。
友を静かに休ませたいという、慶桜の意思もあるんだろう。

つまり、笙家の人間を連れずにあの祠までたどり着ける普通の人間なんていないんだ。

――でも、あの従者、ひとりで龍脈に入ってきたよね。なんでだろう？

## 嵐の前に　（一）

「わあ！　とっても美味しそう！　ねえ鮮花、あれは何て言うんだい？　僕、出来たら食べてみたい」

たくさんの人で賑わう華渓の都。
ごった返す人をひらりひらりと躱しながら、先ほどから同じような台詞ばかり繰り返す龍黎に鮮花は呆れ八割といったため息をついた。
こんなのでも一応は龍王という慶桜国の守護神のような存在だ。
扱いを無碍には出来ない。
――まあ、葵家当主の叔母に龍黎のことを「行き倒れてたから助けた」と説明したのは不可抗力だから許してほしい。
まさかそんな軽々しく「龍王なんです」とか言えるわけがない。
そもそもこうなったのは龍黎が自ら街を見たいと言い出したためだ。
それも、鮮花とふたりきりで、という要望つきで。
誓牙は眉を顰めて真っ先に反対したが（鮮花様と龍王様のふたりだけで出かけるなんて危険すぎる、と言っていたが恐らくただ単にふたりっきりになるが面白くないだけ）叔母の「別にいいんじゃない」で、あっさりと誓牙の意見は折られた。
葵家で当主に口で勝てるものなんていないのだ。
誓牙の心配をよそに鮮花本人は別段そうでもなく、最初から龍黎と出かけることにしていたのだが――

……しかし今、鮮花は龍黎とふたりで出かけたことに激しく後悔をしていた。

もし過去に戻れるとしたら数時間前の自分に「嫌でも誓牙を連れて行け」と言っていただろう。
鮮花はこの数時間の間に龍黎について二つほどわかったことがある。

ひとつ。やたらと好奇心が旺盛。

「鮮花、あれは何？」
「あれは射的よ。鉄砲で落とした景品を貰えるの。でも昼間からやってるなんて珍し……ってあれ？　龍黎？」

隣をみると、ずっとひっついていた龍黎がいない。
きょろきょろと探すと目に留まった建物と建物の間の路地、そこに龍黎はいた。
――いかにもゴロつきだと言わんばかりの男たちに囲まれて。

「なあなあ兄ちゃんよォ、オジサンたちちょーっと困っててさァ」
「十日くらい前から米粒ひとつ食ってないわけよ。ってことでお金貸してくんない？　絶対に明日返すからさあ！」
「十日間何も食べてない！？　それは大変だ！　ちょっと待ってて下さいね、」

誰がどう見たってカツアゲ以外の何物でもない。
しかし龍黎はそんなことにも気づかず、袂から家を出る前に叔母に持たされた金を出そうとする。
ニヤリと、男たちの口角が上がった。
これはいいカモを見つけたな、と。

「ッ、あの馬鹿！」

鮮花は周りの人も気にせずダッ、と駆け出し狭い路地に滑り込み、男たちをかき分けるようにして龍黎の元まで行きそこから連れ出す。男たちは何が起こったかわからなかったようだったから龍黎を連れ出すことは簡単だった。
しかし路地を出て二間ほど走ると背後から「待てこの野郎」などと下卑た罵声が聞こえた。

――ふたつ。疑うことを知らない、というか純粋無垢。

だからさっきもあんなカツアゲに引っかかるのだ。
何せ見てくれだけは大貴族のお坊ちゃんとあまり変わりないのだ。
身に着けている着物や装身具も中々に豪華だし、（ひとつくらい売ってもいいんじゃないか、と鮮花が思ったことは内緒だ）襟足の長い青い髪に涼やかな目元。
顔の部分のひとつひとつにどこか色気があり、雰囲気は育ちの良さを感じさせる……そう、見てくれだけは。
中身は大貴族のお坊ちゃん、と言うより世間知らずのボンボンである。
市場の仕組みも知らなかったし、慶桜国で一番消費されている鶏肉の存在すら知らなかったのだ。
まあ、ずっと祠の中で眠り続けていたと言うのなら仕方がないところもあるが。

そして市場から少し離れた空き地についたころ、やっと鮮花は龍黎の手を離した。
ここまで全力疾走してきたというのに龍黎は息ひとつ乱していない。

「どうして連れ出したの！　あの人たち困ってたじゃないか！」
「はぁっ、はぁっ……見て、わからないの！？　あれっ、どう見てもあんたからお金を巻き上げようとしてたでしょ！」
「でも十日間何も食べてないって……」
「あれは嘘！　もう……どうして……」

本気でわからない、という風に首を傾げる龍黎に対して鮮花は怒る気が消え失せた。
歴代の龍王たちもこんなに無知で純粋だったんだろうか。
だとしたらわざわざそれに付き合っていた笙家の者たちも、なかなかに大物なのかもしれない。

「ところで鮮花、ここは？」

辺りを見回してみると、どうやら子供たちがよく遊んでいる広場の近くまで来たようだ。

「あ、鮮花だ！」
「ほんとだ！　鮮花ちゃーん！！」

鮮花がいることに気づき、声をかけてきたのは葵家の近くに住む伯峰（ほう）と愛鈴（あいりん）の兄妹だった。
葵家の近くに住む子供はこのふたりしかいないので、鮮花もよく面倒を見てきたのだ。

「久しぶりね、ふたりとも。元気にしてた？」
「もちろんだよ！　……ねえ鮮花、その人は？」

と、ふたりは鮮花の隣に立つ龍黎に視線を向ける。
人見知りの気がある愛鈴は伯峰の背中に隠れ、伯峰は伯峰で何故か

龍黎を敵認定したのか敵意丸出しだ。
そんな空気の中、爆弾を投下したのは愛鈴だ。
「ひょっとして、鮮花ちゃんのかれし？」
その発言は鮮花にとっては効果抜群だった。
「は、はあっ！？　ど、どうしてこの人が私の恋人なの！？」
「でも男の人と女の人が一緒にいたらそうだ、ってご本に書いてたよ」
一体全体どんな本を読んだらそんなことが書いてあるのか。
五歳児の読書事情に不安を覚えざるをえない。
「とにかく違うの。この人は……その……」
やばい、どうしよう。
龍王だと言っても信じるわけがないし、恋人じゃないと言った手前からそれを肯定するのも奇妙だ。
鮮花が考えあぐねているとふいに龍黎が口を開いた。
「僕は鮮花の友達だよ。僕は蒼龍黎って言うんだ。君たちは伯峰くんと愛鈴ちゃんでいい？」
いつもの如くへらりとふたりに微笑みかける。
するとそれで警戒を解いたのか伯峰と愛鈴も笑顔を見せた。
しかしいつの間に龍黎はふたりの名前を把握していたのか。
鮮花はふたりの名を呼んだ記憶はないのだが。
龍黎はそんな鮮花の思考を読み取ったのか耳元で、

「僕は慶桜国の民なら会ったことがなくても名前がわかるんだよ」
と小さく囁いた。
流石龍王だ、と鮮花は舌を巻いた。

「それよりふたりとも、あんまり遅くまで遊んでちゃ駄目よ？　またおばさんが心配するわ……それと川には近づかないようにね！　あそこ意外と深いから」
「それくらいわかってるよ！」
「ほんと、鮮花って母さんみたいだよな」
「でも大丈夫だよ！　今日はあたしとお兄ちゃんだけで遊んでるわけじゃないし」

その言葉にふと疑問を覚える。
ここで遊ぶような子供は伯峰と愛鈴以外にいたか。

「え、それってどういう……」
「おいお前ら！　俺をどれだけ待たせる気だ？」

低めの落ち着いた声が響く。
見ると、そこには褐色の肌に赤黒い髪、意志の強そうな赤い瞳をした青年が立っていた。

## 嵐の前に　（二）

「瑛翔（えいしょう）！」

「遅いと思ったら……此奴らは知り合いか？」

ずっと見ていると吸い込まれそうな切れ長の瞳。

瑛翔と名乗った正に凛とした姿の青年に対する鮮花の第一印象はそれだった。

初対面の人間に対して此奴呼ばわりはどうかと思ったが、身なりを見るあたりどこかの貴族の息子なのだろう。

ちらりと隣に立つ龍黎を見ると眉間に皺を寄せ瑛翔を睨んでいた。

……何か不審なところでもあったのだろうか。

「申し遅れた、俺は瑛翔。たまたま近くを通りかかったらこの兄妹が遊んでいてな。二人だけだとつまらないと思って共に遊んでやっていた」

「そうだったの……ここら辺の子供がいる家はみんな華渓の外に引っ越しちゃって寂しがってたの。遊んでくれてありがとう。あ、私は鮮花。こっちは……」

「……龍黎」

不機嫌そうに言う龍黎をちょっと、と小突きながら伯峰と愛鈴を見ると、遊びたそうにうずうずしている。

「二人とも、先に行っておいてくれないか。俺は少し此奴らと話がしたい」

「うん、わかった！」

瑛翔がそう言うと、伯峰と愛鈴は走って去って行った。
ふたりが球で遊び始めたのを見ると瑛翔はゆっくりと鮮花に向き直った。

「貴様らに尋ねたいことがある」
「……何よ」

瑛翔の傲慢不遜な物言いに一瞬怯んだ鮮花だったがなんとか持ち直す。
ここで折れてちゃ、元公女の名が廃る。
しかし次に瑛翔が直球に放った言葉は鮮花と龍黎の想像を遙かに超えたものだった。

「この近くに『龍脈』と呼ばれる場所は無いか」

目に見えて龍黎が動揺する。
黙ってて、と目で制しながら鮮花は続けた。
どきんどきんと、心臓が急激に脈を打ち始める。

「し、知らないわ……龍脈って伝説に出てくる場所でしょ？　どうしてそんなものを探してるの？」
「先日読んだ歴史書にそれのことが書かれてあったからだ。ま、単なる知的好奇心で探そうと思っただけのことだ」
「……そう」

――こいつ、一体なんなの？
鮮花の問いに瑛翔は淀みなく返事してはいるものの、質問に対する答えの核心を得られない。
例えばそう、自分が何者であるとか。
あの答え方じゃ何もわかりはしない。

もっと聞かなくては、と鮮花が口を開きかけたその時。

「きゃあああああああっ！！！」

つんざくような女の子の叫び声は先ほど伯峰と愛鈴が向かった方から聞こえた。

「今の声、愛鈴！？」

「何かあったのか！？」

「……とにかく行ってみよう」

龍黎のその言葉に頷き三人は駆けだした。

今は何故瑛翔が龍脈を探しているか、よりも愛鈴のほうが大事だ。

＊　＊　＊

「愛鈴！　愛鈴！」

必死に妹の名を叫ぶ伯峰を見つけたのは、近くを流れている川の近くだった。

「伯峰！　何があったの！？」

「愛鈴が、愛鈴が！」

「落ち着け。何を言いたいのかさっぱり判らん」

「愛鈴がっ……川に落ちたんだ！」

「何ですって！？」

ばっと鮮花は水面を見るがもうそこに愛鈴の姿はなかった。
この川は意外と深く、大人でさえ底に足がつかないのだ。
そこにまだ五歳の愛鈴が落ちると……

「……待ってて、今助けるから！」
「おい貴様、何をする気……」

瑛翔が言い終わる前に鮮花は川に飛び込んだ。
頭上から龍黎と伯峰が名を呼んだ気がしたが、ここまで来ると戻れない。
底のほうへ行くと意識を失っている愛鈴を見つけた。

（居た……！　愛鈴！）

その小さな体を抱きしめ、さあ戻ろうと意気込んだとき鮮花はふと気づいた。
勢いのまま飛び込んだはよかったものの、

……自分が全く泳げないことに。

（しまっ……！）

なんとか浮上しようともがくが片腕に愛鈴を抱いていることに加え

て普段着ている、太腿くらいまである前開きの着物が体に絡まり動きづらい。
そのうち息も切れ、ごぼっと水を吸い込んでしまった。

（やばい……意識、が……）

必死に水をかいていた鮮花の腕から次第に力が抜けていく。
それでもしっかりと愛鈴だけは離さなかった。

（も……駄目……りゅう、れい……）

意識を手放す直前、光に包まれた青い龍の姿が見えた――

「何なんだ……あれは……」

瑛翔は己の目を疑わずにはいられなかった。
ほんの数秒前、愛鈴を追って飛び込んだ鮮花が戻ってこないことを心配した龍黎が瑛翔の静止も聞かずに飛び込んだ。
オロオロする伯峰を窘めながら水面を見ていると急に光が迸り、水飛沫と共に川の中から鮮やかな青い龍が現れ空を舞う。
慶桜国には龍にまつわる伝説がいくつかあるが本物を見た者はほとんどいない。
だが、今目の前にいるのは本物の龍なのだ。

「わあ……綺麗……」

伯峰の呟きにはっと我に返り龍を凝視する。
よく見ればその背中に意識を失っている鮮花と愛鈴の姿が見えた。
龍黎の姿は、ない。

（まさか、あの男……）

瑛翔がひとつの考えに至り、ニヤリと口元に笑みを浮かべる。
可能性は低ければ確証もない。
だが、瑛翔はその考え――龍黎こそが龍王であることに賭けてみることにしたのだ。

（それならば鮮花とか言うあの娘についても調べねばなるまい）

龍王を従える少女。興味が沸いた。

「伯峰、悪いが俺は用事を思い出してな。彼奴らによろしくと伝えておいてくれ」
「えっ……瑛翔？」

――鮮花たちが目覚めたとき、瑛翔の姿はどこにもなかった。

## 行間　一輪の花

「瑛劉、ここが王宮だ」

何時のことだったかは忘れたが、幼い頃父に手を引かれ王宮へ上がったことがある。
父は現王の右腕たる宰相だったが生まれは貧しく質素なものを好む故、俺が当時住んでいた家もそれほど豪勢なものではなかった。
だからか、初めて間近で見た王宮はとても神々しく見えた。
黙って父の後ろについて歩いているとすれ違う役人たちは皆立ち止まり父に礼をする。
改めて皇凱世（こう・がいせい）という男がどれほど国にとって重要な人物なのか理解した瞬間だった。
しばらく歩くと父の足はある部屋の前で止まった。

「凱世か。今日も元気そ……ん？　その子供は？」
「俺の子だ、瑛劉だ。確か千花姫と四つ離れていたか」
「……お前に千花はやらないぞ」
「ハッ、親馬鹿も度が過ぎると目にあまる。千花姫はまだ四つだろう？」

金髪蒼眼。
父が礼もせずずかずかと入った部屋にいたのはそんな特徴的な容姿の男だった。
それを見て俺はハッとする。
金色の髪に蒼い瞳、半分異国の血が流れた故にそんな容姿を持つのは――この国には国王・笙華治（しょう・かじ）しかいない。
悟った瞬間俺の顔からさあっと血の気が引くのが自分でもわかった。

主上に対してそんな慇懃無礼な態度をとって良いものなのか。
しかし主上本人は意にも介さず爽やかな笑顔を浮かべて父と談笑している。

（……なんだかおれ、蚊帳の外な気がする）

何やら話の延長線上で父が主上の頭を叩いたところで俺は足音を立てぬよう、忍び足で部屋を出た。

＊　＊　＊

出たところで王宮なんて来たこともないから行くあてもない。
書庫へ行って俺が読んだことのない兵法書を拝借しようと思ったが、フラフラしすぎると役人に見つかって面倒なことになりかねない。
俺は自然と人通りの少ない回廊を歩き宛てもなく王宮をさ迷っていた。

ふと気がつくと庭園らしきところに出ていた。
流石花の名を持つ王が代々住む宮なだけあってそこかしこに花が咲き乱れている。
その花畑に囲まれるようにしてひとつの建物があった。
恐らくは離宮のひとつだろうが、それほど派手ではなく落ち着いた

感じの外装となっている。
好奇心からその建物に近づき窓から中を覗き込むとどうやら寝室のようで、天蓋のついた寝台に女が横たわっている。
その横には子供が立っていて、何か女と会話したあと女官に連れられて出て行った。

（……綺麗だ）

当時八つだった俺から見ても、その女はとても美しかった。
病のせいで顔は青白かったがそれがいっそう、美しさを際立たせていた。

「……そこの子、中に入りなさいな」

ふと部屋の中から声がして俺はびくりと肩がはねた。
部屋の中を見ると女が上半身だけ起き上がりこちらを見ている。
恐る恐る窓を開けて中に入ると、部屋は思っていたよりも広くそれなりに調度品も豪華なものが使われていた。

「あなた、お名前は？」
「……瑛劉」
「瑛劉……あなた、ひょっとして凱世の息子？」
「父上を知っているのか？」
「ええ、もちろんよ。だって私と凱世は友達だもの」

父上と友人、ということは後宮の女官だろうか。
こんなに広くて豪華な部屋が宛がわれているんだから筆頭女官か、それに近い位に違いない。

「あなたは？」

そう問うと女は少し考える素振りを見せ、
「……そうね、私のことは凛明(りんめい)って呼んで頂戴」
そう言って青白い顔で花のように笑った。
その笑顔に、俺は柄にもなく死んだ母に思いを馳せる。

『母上、薬を持ってきました！』
『いつもありがとう、瑛劉……あら？　それは？』
『近くに咲いていました。ぜひ母上に見せたいと思って……』
『フフッ、そうだったの。ありがとう』

そうだ、俺も母が倒れたとき薬や花を持って見舞いに行ったな……
結局それも効果なく一年ほど前に母は亡くなったが。
確かに、優しい母上だった。
この美しい女――凛明もいずれは……

「瑛劉？　どうかした？」
「っ、いや……別に……」

死んだ母親のことを考えていただなんて口が裂けても言えない。
もう八つなのに母上のことが大好きなのね、と笑われて終了だ。
しかし凛明はまた少女のように笑って枕元にあった百合の花瓶から
一輪の白い小さな花を取って、俺に差し出した。

「はいこれ、瑛劉にあげる」
「……おれに？」
「だってあなた、寂しそうな顔していたもの。本当は百合の花をあ
げたかったけどこれで元気出して？」

ああ、柄にもないことをすると全部顔に出るらしい。

「ありがとう」

そして俺はまた柄にもなく、笑顔で感謝の言葉を述べた――

「……ま……りゅうさま、瑛劉様」

繰り返し名を呼ぶ李鴻の声で俺の意識は浮上した。
執務室の椅子に座ってうたた寝していたせいか身体中が軋む。

「……どうした、李鴻」

たとえ昼寝でも寝起きが不機嫌なのは低血圧の宿命だと思ってほしい。
それをわかっている俺の出来すぎた側近は困ったように笑ってからまたすぐ元の表情に戻った。

「以前頼まれました、例の娘の件ですが」

「ほう……で？」
「……葵彩憐（き・さいれん）との血の繋がりはありませんでした」
「やはりな。ではあの娘は本当に千花姫か？」
「いえ、まだ確固たる証拠は……」
「徹底的に洗い出せ。奴が本当に死んだはずの千花姫ならば利用価値は大いにある」
「御意に」

あれから何年経ったか覚えていない。
でも僅かな間に国や俺の周囲は変わった。
白百合の君の崩御、父の態度の変化、そして……父が笙家を滅ぼした。
あの姫もずっと殺されたと思っていた。
だが……俺の見立てが間違っていなければ、どうやら生きているらしい。

「使えるものはどこまでも利用させてもらう……たとえそれが千花姫だったとしても」

あの日出会った女がどうしているのかはわからない。
病で死んでいるか、もしあの後も生きていたとしても笙家滅亡の日に殺されているだろう。

（どちらにせよ、凛明にはもう会えないということか……）
「柄にもなく感傷に浸るとは……俺もまだまだだな」

フ、と笑って俺は居眠りで止まっていた政務を再開した。

――あの日、凛明から貰った花は本の栞にして俺の手元に残っている。
それを持っていると、また少女のように笑う彼女に会えるような、そんな気がして。

## 望まぬ輿入れ　（一）

すっと目を開けると見慣れない調度品が並べられた部屋にいた。
決して眠っていたわけではない、考えに耽っていたのだ。
調度品の数々はどれも隣国・シルキアードから取り寄せたものや、慶桜国の職人による超一流品ばかり。
その全てが国内の有力貴族たちから贈られたものだ。
貴妃になったばかりの娘の機嫌を取らなければならないなんて、貴族も暇なんだと嘆息した。
ふと見た大きな鏡に映っているのは一瞬誰だかわからなかったが、よく見ると紛れもない自分自身。
その姿はなかなか見慣れず、普段は頭の後ろでひとつに纏めてある髪は全て降ろされ、そのうちの一部は丁寧に結われている。
服装だって白地の絹織物に赤や白、金色で豪奢な刺繍が施されたものだ。
刺繍であしらわれているのは鶴などのおめでたいものばかり。
それを見て鮮花は改めて、今日自分が輿入れすることを悟った。

＊　＊　＊

――三週間ほど前。

いつものように市場で売り子をし、家に帰るといつもと雰囲気が違

っていた。
まず叔母と龍黎が神妙な顔をして帰ってきた鮮花を迎えたこと、そして普段はまだ帰宅していない誓牙がいたこと。
そして何よりも、灰色の髪の見たことのない男が呑気に茶を啜っていたことだった。
しばし呆然としていると叔母に促され机を挟んで男の前に座る。
龍黎はどうしたら良いのかわからず入口付近でオロオロしている。
鮮花と叔母が席についたのを確認すると、男はコトンと湯呑みを置いた。

「突然お邪魔して申し訳ありません、彩憐殿」
「いえ……あの、」
「いや、申し遅れました。杜李鴻と申します。慶桜国国王、皇瑛劉陛下の側近を務めている者です」

側近、ということは王宮から来た者。
龍黎以外の全員に緊張が走った。
誓牙はもう腰の刀に手をかけている。
何かあればそれで斬りつけてもいい、それを確認した叔母は改めて李鴻に向き直った。

「それで、杜殿は私の娘に何の御用なのでしょうか？」
「それが……いや、もう率直に申し上げましょう。鮮花殿、主上が貴女を娶りたいと仰っているのです」
「なっ……！」

即ち後宮に入れということか。
正直、庶民とほとんど変わらない弱小貴族の葵家から娶っても王側には何の利益もない。
鮮花はますます国王の考えていることがわからなくなってきた。

「……ねえ、鮮花は国王のお嫁さんになっちゃうの？」
ふいにそう問うたのは龍黎だった。
「主上はそう望んでおられます」
「っ、僕は嫌だよ！　鮮花にはずっと傍にいてほしいよ！」
「落ち着いて龍黎！　大丈夫。私はどこにも行かないわ。それに……」
それに、と鮮花は考える。
庶民同然の生活を送っているとは言え、鮮花は笙家の人間であることに変わりはないのだ。
もし官吏に笙家派の者が残っていて鮮花が千花姫であることが露呈すると、きっとその者たちは鮮花を「正統なる慶桜国の後継者」として祀り上げ、また要らぬ争いを生む原因になる。
復権を望まぬ鮮花には、この話を受ける義理もない。
断ろうと口を開いたその時、
「このお話を受けるか否かは鮮花殿の自由です……が、お断りになられればどうなるか、聡い貴女はお判りでしょうね？　千花姫」
千花姫、と呼んだことにピクリと鮮花の眉がはねる。
（この人、私の正体を知って……！）
尚も李鴻は薄く笑みを浮かべたまま続ける。
「主上が『千花姫は生存し、ごく普通の子女として暮らしている』と仰れば、どうなるか」

「汚いぞ貴様！！」

激高したのは誓牙だった。
国王がそう民に発表してしまえば鮮花がこれまでと同じような生活を送ることは不可能になるだろう。
それに、誓牙や叔母の立場も微妙なものとなってしまう。

「……鮮花、」

思い悩み下を向いていた鮮花がふと叔母の顔を見ると、その瞳はとても優しく、「無理をしないで」と言っているようだった。
実際この叔母は鮮花の為なら風当りが多少強くなろうと構わないと言うだろう。
無論、それは誓牙も同じ。
十年間育ててくれた優しい叔母に迷惑をかけたくはない。
それに自分が貴妃として後宮に入れば葵家に援助だって出来る。
母・白百合の君だってそうしていたのだから。
再び李鴻を見据えた鮮花の瞳に、もう迷いはなかった。

「杜殿、このお話お受けいたします」
「鮮花！？」
「鮮花様、どうして……」

泣きそうな顔で見つめる龍黎と、信じられないと言う表情で見つめる誓牙に鮮花はにこりと、花のような笑顔を向けてから李鴻に向き直った。

「ただし条件があります」
「ほう、それは？」
「ひとつ目は私が笙華治の第一公女、千花であることを公表しない

こと。ただの葵家の子女として扱っていただきたいのです」
「お安い御用です。他には？」
「ふたつ目は、そこにいる菖誓牙を武官として私の護衛につけること。みっつ目はこの蒼龍黎を私の側近として共に後宮に上げていただきたいのです。この三つを呑んでいただけるなら、私は後宮へと参りましょう」
「……善処いたしましょう」

そう言って李鴻は王宮へと戻って行った。
恐らく鮮花の要求は全て許可されるだろう。
護衛や側近としてならいつでも自分の傍にいてくれる、そう思ったから鮮花はそのような要求を出したのだ。
叔母や誓牙、龍黎が考え直すよう何度も鮮花に言ったが彼女が考えを曲げることはなかった。
――望まぬ輿入れでも、自分のこと、何より誓牙や叔母のことを考えると呑むしかないのだ。
しかし鮮花には、何故国王が自分を貴妃に、という理由がこの時はまだわからなかった。

## 望まぬ輿入れ　（二）

それから数日が経ったある日、葵家に王宮からの使者が文を持ってやって来た。
鮮花宛てにと渡された文はかなり上等な紙が使われていて、王家である皇家の印が押されていた。
叔母たちが心配そうに見守る中、文を開くとそれは国王・皇瑛劉からのもので、書いてある内容を要約すると「要求は全て呑む、七日後に王宮へ参れ」とのことだった。

「鮮花様、本当に後宮へ入られるのですか？」
「そうよ、主上だってそのうちあなた以外にも妾妃を娶られるでしょうし、あなたが貴妃だなんて……後から辛くなるのは鮮花なのよ。今なら私の名前で断ることだって出来るわ。だから、」
「叔母さん」

鮮花は一度そこで叔母の話を切る。

「叔母さんが私のこと心配するのはわかるわ。でも王様ってみんなそんなものでしょ？　だったらさっさと皇后になっちゃえばいい話だし」

あっけらかんと言い切ったが、それが何よりも困難であることは鮮花自身がよくわかっている。
鮮花は一応、葵家の出自として扱われている。
貴族としての位の低い葵家の女が皇后になれるわけがない。
貴妃というだけでも破格の待遇なのだ。
無論それは向こう側が鮮花が笙家の出自だとわかっているからそう

なっているのだが、実際蓋を開けてみると事情を知らぬ者からは心ないことを言われることは確実だろう。
鮮花の母・白百合の君は皇后だったが、あれは笙華治が白百合の君しか皇后に望まなかったためそうなっただけであって、正に例外中の例外である。
しかも笙家の生き残りだと知られれば確実に争いの火種となる。
叔母も誓牙も、そこを心配しているのだ。

「それに私が主上の妃になれば叔母さんたちの生活だって安定すると思うの。杜殿だって私の正体は伏せてくれるって言ってたし叔母さんが心配することなんて何も、無いから」

そう言って笑う鮮花から悲壮なまでの覚悟を感じ取り、誓牙と叔母は何も言えなかった。

＊　＊　＊

龍黎が一緒に散歩をしようと誘ってきたのはその日の午後だった。
王宮に輿入れするための準備があったが、葵家の数少ない使用人たちが「自分たちがやっておきますから、鮮花様はゆっくりしていて下さい」と言って譲らなかったので任せることにして、彼と散歩に出かけることにした。
使用人たちは自分を気遣って言ってくれている、そう鮮花は感じた。

「見て、鮮花！　秋桜があんなにたくさん！」
「わあ！　もうこんな季節なのね……」

気候は大分涼しくなってきたが昼下がりともなるとまだ少し暖かいと感じる。
秋用の薄手の衣服を着て出てきたが鮮花は袖を肘あたりまで捲っていた。

「ねえ、龍黎は暑くないの？」
「んー……特に何も感じないかな。そこら辺、やっぱり人間と龍王で違うのかな」

やはりへらりと笑ってそう言った。

「……なんだかそう言うと寂しいわね。こうやって龍黎と一緒にいるのに、人間と龍王で違うだなんて」
「そうかなあ？　僕はそう思わないけどな。だって僕が龍王だったから鮮花に出会えたんだよ？」
「っ、急にそんなこと言わないでよ！」

と言ってそっぽを向いた鮮花の顔は赤くなっていた。
隣で龍黎が「え、どうしたの？　僕何か言った？」と若干焦りながら言っているが鮮花は無視した。
天然って本当に恐ろしい。
火照る顔を押さえながら改めてそう思ったとき、ふと視界に茎の下のほうからぐにゃりと折れ曲がってしまっている秋桜を見つけた。

「あ、これ……」
「きっと誰かが踏みつけたんだろうね」
「まだ枯れてないのに……可哀想」

可愛らしいはずの桃色の花びらは微かに黒ずんでいる。

龍黎の言ったことは恐らく間違っていないのだろう。
美しく咲いていても、踏まれてしまえば元には戻れず枯れるのをただ待つのみ。
鮮花には何故だかそれが自分の未来を暗示しているように見えて不安になった。
これはずっと育ててきてくれた叔母に恩返しをするためと割り切っていても、心の奥底では後宮入りなど望んでいないのだ。
するとふいに龍黎がしゃがみ込み折れ曲がった秋桜に掌をかざした。

「鮮花、見てて」

そう言うとみるみるうちに秋桜は光に包み込まれていく。
まるで龍黎の力が掌から溢れていくようにして。
そして光が収束したとき鮮花が見たのは、折れ曲がっていたのが嘘のようにしゃんと背を伸ばして咲いている秋桜だった。

「え、どうして……龍黎、何したの？」
「寿命が尽きて死んでしまったものは戻すことが出来ないけど、こんな風にまだ生きていられるのに死んじゃったものなら僕は戻すことが出来るんだよ」
「どうして、そんなこと……」
「……だって鮮花、悲しそうな顔してたから」

すっと龍黎は立ち上がり鮮花の横に並ぶ。
鮮花より頭ふたつ分高い龍黎は自然と彼女を見下ろす形になる。
何時になく真剣な表情で見てくる龍黎に鮮花の胸はどきん、と高鳴った。

「ねえ、鮮花。鮮花はずっと僕のそばにいてくれる？」
『ねえ、飛燕（ひえん）。飛燕はずっとあたしのそばにいてくれるよね？』

ふと、鮮花の脳内にひとつの映像が駆け巡る。
そんな光景に覚えはないし、第一飛燕なんて知り合いはいない。
少し考え込んでいると心配したのか「鮮花？」と龍黎が問うてくる。
今考えるべきことじゃないと、鮮花は無理矢理それを頭から追い出した。

「当たり前よ。龍黎こそ、私のそばにいてくれるの？」
「僕は君が死ぬまでずっとそばにいて、君のことを守るよ。だから、」

そう言って一旦言葉を切り、呼吸をひとつしてから続けた。

「だから、困ったとき、辛いとき、僕に言って。僕ならこんな風に君を助けることが出来る。鮮花の力になることが、僕の望みだから」

ふわりと龍黎は笑った。
それが龍黎の精一杯の優しさだとわかったとき鮮花は涙が溢れそうになった。

（泣いちゃ駄目なんだから）

泣かないと決めたのは鮮花として生きることを決めたときだ。
誓牙や叔母が必死で頑張っているのに、泣いて困らせたら駄目だ。
気づけば鮮花は「泣かない子」になっていた。
でも、

（龍黎がいれば、大丈夫かもしれない）

彼の前でなら、泣けるかもしれない。

でも今はそのときじゃない。
溢れそうになった涙を無理矢理引っ込めて、釣られるように鮮花もふわりと笑った。

――秋桜が風にゆらゆらと揺れる、秋のことだった。

## 望まぬ輿入れ　（三）

七日後、鮮花は龍黎・誓牙と共に王宮にいた。
足を踏み入れるのはあの事件以来実に十年ぶりのことで、内部のほとんどはやはり焼けてしまったのか改築されていたが、それでも鮮花が七年間住んだあの王宮であることに変わりはなかった。
右後ろにいる龍黎をちらりと見るといつものへらりとした表情で花瓶に活けられた花を見て「あ、山茶花だあ」などと無邪気に言い、左後ろにいる誓牙を見ればとんでもない殺気を放っていた。
恐らくいつでも鮮花を守れるように、という誓牙なりの配慮だろうが確実に周りの女官が怖がっている。

（良くも悪くも、いつも通りね……）

はあ、と鮮花はひとつため息をついた。
……一応、ここは謁見の間なる場所なのだ。
目の前には王が座る玉座。
周りの壁や柱も王の威厳を象徴するかのように金や紅玉などの凝った装飾で飾られている。
部屋の東側に入口があり、残った三方には窓がついていてどこからでも光が差し込んでくるが、何故か北側の窓だけは暗幕が張られていた。
ここでひとつ、鮮花は疑問をぶつけてみることにした。

「ところで、誓牙は主上の顔って見たことあるの？」
「それが……私も見たことはないのです。先代の皇凱世ならありますが」

と言うと誓牙は剣の柄を握る力をぐっと強めた。
あの日のことが蘇ったんだろうか。

「今の主上はあまり公に顔を見せない方だそうですからね。酷い醜男だったらどうしますか？」
「そりゃあ……ちょっとは困るかもしれないけど、貴妃になるって決めたんだもの。容姿云々なんて言ってられないわ」
「そのときは私が貴女と龍黎を連れて王宮から逃げ出しますよ」
「……静粛に。慶桜国国王陛下、皇瑛劉様の御成りである！」

臣下であろう老齢の男が高らかに言うと同時に玉座の後方にある扉がギギギ、と重たく開く音がした。
王が謁見の間に入ってきた合図だ。
鮮花たちは片膝をつき頭を垂れ、臣下の礼を取った。
この形の礼を知らないであろう龍黎にも事前に仕込んでおいたので抜かりはない。
王が玉座についた気配がした。

「面を上げろ」

謁見の間に、王の低い通る声が響く。
それを合図に玉座のほうへ顔を上げるとそこには、

「え、瑛翔！！？」

褐色の肌に赤黒い髪、強い意志を宿した赤い瞳。
一度見たら忘れられない容姿を持った、瑛翔その人だった。

「ど、どうして瑛翔が……」
「無礼者が！　主上の御前だぞ！！」

「李鴻、落ち着け。彼女は俺の妻になる女だ、少しは大目に見てやってくれないか」

龍黎を見るとやけに神妙な顔つきでやっぱり、と小さく呟いた。

「気が付いていたの？」

「ううん、瑛翔が王ってところはわからなかったけど……僕には名前がわかるから」

龍黎は慶桜国の民なら名前がわかる力を持っていた。

そういえば瑛翔と出会ったとき、龍黎が何やら難しい顔をしていたのを思い出した。

あれは「名乗った」名と「視えた」名が別だったからなのか。

ふと鮮花があたりを見回すとことの成り行きを見ていた武官や女官たちがぽかん、とした顔をしている。

（しまった、ここ謁見の間だった！）

さっと鮮花は再び臣下の礼を取り、王に頭を垂れた。

「……お見苦しいところを申し訳ありません、主上。私は葵彩憐が娘、葵鮮花と申します」

そう名乗ると、辺りから「葵家ですって」「白百合の君のご生家の……」「しかし葵家の娘を娶るだなど、主上も何を考えているのだか」「釣り合わないわよね」などと、嘲りの言葉が鮮花の耳に入ってきた。

最初から覚悟していたことだ。

これくらい……

と、鮮花が歯を噛みしめてぐっと堪えていたその時。

「黙れ。貴様ら、俺の選んだ女を侮辱する気か？　それは俺をも侮辱するということだ！……即刻この場から立ち去れ、俺が貴様らを斬りつけんうちにな」

眼光鋭く言い放ったからか、それとも彼に気圧され恐れ慄いたか、武官や女官たちはそそくさと謁見の間から立ち去って行った。
途端、場がしんと静かになる。
残されたのは鮮花たちと瑛劉、李鴻のみ。

（もしかして、守ってくれた……？）

普通ならあそこでも放っておいていいはずだ。

「あの……主上、」
「そのように畏まらなくても構わん。俺のことは好きに呼べ」

ぐ、と鮮花は言葉に詰まる。
好きに呼べと急に言われたところで相手は一国の王、そんなすぐに砕けた態度がとれるわけではない。
困っていると瑛劉はにやりと不敵な笑みを浮かべた。
それに気づいた誓牙は鮮花を守るように一歩前に出た。

「まあ、都合良く人払いが出来たんだ……ここらでひとつ種明かしとでもいこうか。なあ、鮮花？」
「……どういうことよ」
「何故俺が元公女であるお前を娶ろうと思ったか貴様は疑問に感じたことがないのか？　しかも今の貴様は葵家の娘だ。貴族の中でも下位の葵家から娶ろうなど、普通は誰も考えんだろう」

当然、鮮花はこの数日間疑問に思っていた。
自分を娶ったところで瑛劉には何の利益もない、むしろ不利益なことばかりだ。
しかしどう考えてもわからなくて鮮花は瑛劉を睨みつけた。

「そんな怖い顔をするな。別にお前を傷つけようとかそういうのではない。用があるのは……お前だ」

すっと瑛劉が指差したのは鮮花ではなく、その後ろの龍黎だった。
鮮花は息を呑む。
……何故龍黎が。

「……僕かい？」
「どうして龍黎なの！？　彼は私のただの側近で、」
「誤魔化すのはやめろ、見苦しい。本当にただの側近か？　蒼龍黎、貴様……いや、貴殿が慶桜国に伝わる龍王だということは既にこちら側でわかっている」
「まさか、最初から龍王が目的で鮮花様を……？」
「……そうだ」
「ッ、貴様ァッ！！」
「誓牙！！」

誓牙が剣を抜き、玉座に座る瑛劉に斬りかかる。
剣を大きく振りかぶった瞬間誓牙の前に影が立ちふさがり、キィン！と刃同士の交わる音がした。
影の正体は、李鴻だった。

「……剣を収めていただけませんか、菖誓牙殿」
「貴様こそ引け。私はそこのふざけた王を斬らねば気が済まない」
「やめて誓牙！　剣を収めて！」

「しかし奴は鮮花様を、」
「いいから収めなさい！　……ここは王宮、謁見の間よ。こんなところで剣を抜いたらどうなるか、一番判っているのは貴方のはずよ」
鮮花にそう言われると誓牙は大人しく引くしかなかった。
李鴻と最初に出会ったときはただの温厚な側近のように見えたが、剣術に関しては慶桜国で右に出る者はいないであろう誓牙の剣を易々と止めたのを見ると、ただの文官ではないようだ。
誓牙が剣を鞘に納めたのを確認すると李鴻も身を引き、玉座の後ろへと戻った。
「私の従者が大変な無礼を……申し訳ありません、主上」
「構わん。今のは不問にしてやろう」
「……それで、僕に何の用だい？」
鮮花を守るようにして龍黎は一歩前へ進み出た。
いつものへらりとした表情も今は消え失せ、どこか緊張が漂っていた。
「まずはこれを見てくれないか」
と言うと瑛劉は玉座から降り、部屋の北側にある窓の暗幕を開けた。
「っ……何、これ……」
そこに広がっていたのは鮮花が知る慶桜国とは全く別の世界だった。
窓から見える建物のすべてが廃墟。
人々はやせ細り、道に行き倒れている民もいた。
すべてが荒廃しきった慶桜国の一部の現状は国民たちに知らされない。

下流貴族とはいえ、ちゃんとした生活を送っている鮮花たちは知らなくて当然のことだった。

「慶桜国の一部は腐りきっている……理由は様々だ。シルキアードが崩壊してから、と言うのもあるが……俺は龍王の加護がなくなったからだと見ている」

「だから私を使って龍黎を……？」

「ああ。龍王は笙家の者にしか従わぬと聞いたことがある。幸いにも民たちはそのことを知らないようだからな、俺が召喚したということにして貴様と龍黎で荒廃しきったこの国を救ってほしい」

「……でも、」

真剣な表情の瑛劉に、鮮花は言葉に詰まった。

――それだと慶桜国の民を騙していることになるんじゃないか。

縋り付くように龍黎を見ると、もう何かを決心したように頭ふたつ分低い鮮花に微笑みかけていた。

「龍黎？」

「龍王は笙慶桜が創った国とその民を守るためにいるんだよ。慶桜国を守れるなら僕はいくらでも力を使うよ」

「……あなたはそれでいいの？」

「もちろん」

迷いなくきっぱりと龍黎はそう答えた。

鮮花は一瞬それが恐ろしくも感じられた――自分が今から利用されるとわかっているのに何故笑っていられるのか、と。

「決まりだな。百合の宮を用意させた、そこで休め」

「百合の、宮……？」

それはかつて母と共に住んでいた離宮の名だった。
住み慣れた宮のほうが良いだろ、と続ける瑛劉に鮮花はますます彼のことがわからなくなっていった。

（いい人なの！？　悪い人なの！？）

とりあえず今は休みたい。
謁見の間に入ってきた女官たちに連れられて、鮮花は百合の宮へと入っていった。

## 望まぬ輿入れ　（四）

目まぐるしく過ごした数日間のことを思いだして、鮮花は人知れず嘆息した。
改めて鏡を見ればそこには普段しない化粧を施してこれでもかというほど着飾った自分自身。
こんな派手にはしたくない、と瑛劉に嘆願したものの「俺が初めて迎える妃との婚儀なのだ。派手にしなくてどうする」とあっさり却下された。
普通花嫁の意見を最優先にしないだろうか。
王族だから仕方ないと言われればそれまでなのだが。

「何を落ち込んでいらっしゃるのですか？」
「シンディ」

さっと入ってきたのは筆頭女官のシンディだった。
金色の髪に青い瞳、ついでに発音しづらい名前。
鮮花の予想は正しく彼女は隣国・シルキアードの生まれだった。
慶桜国には、国家の崩壊が始まっているシルキアードから出稼ぎに来ている者も多いが、王宮の女官にシルキアード人がいるとは思わず最初は鮮花も驚いたものだ。
でもこれだけ流暢に慶桜国の言葉を話せるし礼儀作法も文句のつけどころがない。
教養もあるし、稼ぎの良い女官になるのはごくごく自然なことだった。

「いえ、別に落ち込んでなんて……」
「私にはそう見えましたわ。あ、ひょっとして鮮花様、マリッジブ

ルーですか？」
「ま、まり……？」
「ああ、すみません。婚儀前に憂鬱になることですわ」
シンディはこうして時折異国の言葉を使う。
瑛劉は難なく意味を理解しているが鮮花は異国語を少し齧ったことがある程度で日常会話ではさっぱりだ。

「そうでした。鮮花様、お二方をお連れいたしました」
「お二方？」

言うが早いか、待ってましたと言わんばかりに誓牙と龍黎が現れた。
誓牙は普段見ることのない正装で、いつもは紐で結わえて後ろに垂らしてある菫色の髪も全部帽子の中に押し込めてある。
剣だって護身用ではなくお飾りにすぎない脇差だ。
一方龍黎はこの日の為に仕立てた深い蒼の着物姿だった。
所々、赤い糸で龍が刺繍されている。
しかしどんなに着飾っても龍黎は龍黎。
鮮花を見るなりぱっと顔を輝かせた。

「わあ、鮮花綺麗だね！」
「ありがとう」
「……でも、もう瑛劉のお嫁さんになっちゃうんだよね」

ふっと、龍黎の表情に影が落ちる。
すると誓牙が葉冠を手に鮮花の前に立った。

「誓牙、それは……？」
「これは龍桜の葉で作った冠です。代々王家の花嫁はこれを頭に被せて婚儀に臨んだそうです……なんでも、龍の加護が得られるよう

にと」
誓牙はちらりと龍黎を横目で見ながらそう言った。
龍の加護も何も、龍王は隣にいる。
「でもこの葉っぱ、すごく綺麗」
「葉脈が龍の鱗のようだから龍桜、だそうです。桜なのに常緑樹なのでお目出度いとも言われています」
だから祝い事には欠かせないんです、とどこか寂しそうに誓牙は続けた。
二人にそんな顔をされたら「まりっじぶるー」とやらもどんどん鮮花の中で進んでしまう。
そんな空気の中で、明るいシンディの声が響く。
「本来は花嫁の父親にこれを載せていただくのですが、鮮花様にお父上はいらっしゃらないと聞いたので特別に誓牙殿に」
「そう、なんだ……誓牙、お願いね」
「……はい」
そう言うと誓牙は神妙な面持ちで恐る恐る、葉冠をそっと鮮花の頭に載せた。
本来ならきっと祝福されて贈るであろうそれ。
涙を浮かべながらも笑顔で花嫁の頭に載せられるそれを、実の父親なら今の状況で「幸せになれ」と言って載せてくれただろうか。
忙しい公務の間をぬって自分と母に会いに来てくれた金髪蒼眼の父親の後姿を、瞼の裏に思い浮かべた。

＊　＊　＊

婚儀は滞りなく終わった。
瑛劉も王としての正装――と言ってもシルキアード風の洋装と言った感じのもの――で、鮮花は一瞬だけその黒に見惚れたが、瑛劉は一度も鮮花を褒めることはなかった。
来賓客はみな国内外の貴族たちで、事前に瑛劉が釘を打っておいたのか誰も鮮花の出自について話す者はいなかった。
都に面した窓から外を見ると国民たちが盛大に国王の結婚を祝っていた。
それを見て鮮花の胸はちくりと痛む。
民たちはこんなに祝ってくれているのに、私は……

（母様もこんな風に祝われたのかしら）

少なくとも自分みたいに作った笑顔を張り付けていたのではなく、心からの笑顔で父の隣に立っていたのだろう。

（でも私の輿入れは民のためなんだから）

そう、これは他の何でもなく民のため。
荒廃が進む慶桜国を救うため、だ。

「……やってやろうじゃないのよ」
「葵貴妃様？」
「あ、いや……何でもないわ」

そうだった、と鮮花は油断していた。

婚儀も終わったあと瑛劉と言葉を交わす暇もなくシンディに百合の宮まで連れて行かれ、数人の女官たちに介助されながら湯浴みをした。
自分は大人しくしてるだけで誰かに身体を洗ってもらう、なんてことは久しく無く、しかもそれが子供の頃ならいざ知らず恥も覚えた大人になった今それをされたものだから、鮮花はただただ居心地が悪かった。
あれよあれよと言う間に化粧は全て落とされ、気がつけば白い夜着を着てシンディに連れられ回廊を歩いていた。

「ねえ、どこに行くの？　あっ、そう言えば誓牙と龍黎は？」
「お二方には百合の宮でゆっくりお休み頂いています。慣れない場でお疲れだったようなので……」

誓牙と龍黎は婚儀の場となった謁見の間で見たきりだったが、部屋を出る瞬間に見えた二人の表情はとても疲れ切っていた。

「それと今向かっているのは主上のお部屋に御座います」
「瑛劉の？　どうして？」

自然な疑問として鮮花は問うたつもりだった。
回廊から見える空はもう黒く、月があたりを照らす時間帯だ。
こんな時間に瑛劉のところへ行ってどうする。
しかしシンディは少し不穏な表情で鮮花に爆弾を投下した。

「葵貴妃様、その……非常に申し上げにくいのですが……ヨトギ、ですわ」
「ヨトギ？」

どんな漢字を当てはめるかわからなくて鮮花は首を傾げた。

ヨトギ、ヨトギ……夜伽！？

「えええええええっ！？」

その意味を理解したとき頭が混乱して思わずはしたない大声を出してしまった鮮花を責めることもなく、シンディは静かに頷いた。

（夜伽って夜伽って、ええっ！？）

鮮花の知識が正しければ、であるが大方正解だろう。

どうしようどうしようと思案している間に瑛劉の部屋の前に着いてしまっていた。

「……では葵貴妃様、こちらです」

（嘘ぉ……）

逃げ出す暇もなく、瑛劉の部屋の扉が開けられ鮮花は部屋に足を踏み入れた。

縋り付くように背後のシンディを見たがすでに彼女はいなくなっていた。

「随分遅かったじゃないか」

「え……瑛、劉……」

今まで読書をしていたらしい瑛劉が本を閉じ顔を上げた。

瑛劉も先ほどの堅苦しそうな正装とは打って変わり簡素な衣服だった。

――正装も見慣れないものだったが、普段着も中々に見慣れない。

「それ、異国の服なの？」

「シルキアードのものだ。ちなみにシルキアードの言葉でこれはシャツとズボンだ」

と言って瑛劉は自分が着ていた衣服を指してそう言った。

「……で、だ。鮮花、」

（えっ……？）

瑛劉が言い終わらぬうちに鮮花の視界は反転し、目の前には寝台についている天蓋と瑛劉の顔。

背中には柔らかい感触。

――寝台に押し倒されているのだ。

「ここに来たと言うことは、何をするか解っているのか？」

「っ、嫌！　放してっ……！」

必死に抵抗するも両の手首は瑛劉の手によって拘束され鮮花の頭の上で一纏めにされている。

足を使おうにも瑛劉が覆いかぶさっているから自由に動かせない。

「一人者でフラフラしてた俺がやっと身を固めたんだ……民たちが次に望むのは跡継ぎだ。元王族ならその大事さがわかるだろう？」

「それは……そう、だけど、でもっ！！」

「でももだってもない。俺たちがどういう経緯でこうなったか、俺たちがどう思っているか民たちは知らない、しかしそのうち民は跡継ぎを求めだす……奴らは安心したいんだ。跡を継ぐ者がいなければ、国は終わる」

ぴしゃりと言い放ったその言葉に、それまで抵抗していた鮮花からふっと力が抜ける。

『民のため』。
この数日間口癖のように繰り返してきた言葉だ。
龍黎の力で国を建てなおして、自分が跡継ぎを産めばいいだけの話。
それで慶桜国は平和になって民は安心する。
必要なことがひとつ、増えただけ。
それを察したのか瑛劉は「それでいい」と囁き、夜着の合わせ目に手をかけた。

（……どうしてあんたが出てくるのよ）

腹を括って目の前の瑛劉のことだけを想おうとしたのに、こんな段にもなって出てくるのは鮮花の唇を奪った、蒼い髪のへらりと笑う龍王の姿。
どうしてあの笑顔と口づけの思い出が、他の男に押し倒されているのに頭から出て行ってくれないんだろう。

（ごめんね、龍黎）

目を閉じ、瑛劉にすべてを任せようとした、その時。

「鮮花っ……鮮花！！」

がきょっ、となんとも形容しがたい嫌な音をたて扉を開けたのは、

「っ、龍黎！？」

今まで見たことのないような表情を浮かべる龍黎、その人だった。

「龍黎！」

瑛劉が一瞬だけ怯んだ隙をつき彼の下から脱出した鮮花はそのまま龍黎の胸に飛び込んだ。

龍黎は飛び込んできた鮮花を見るとそれまでの表情を一変させ、穏やかな顔つきになる。

「……もう、大丈夫だから」

「おいおい、貴様どういうつもりだ？　初夜を迎える夫婦の寝室に乱入とは、無粋だぞ」

「鮮花が怖がっていたから、それだけだよ」

そのままぎゅっと鮮花を抱きしめる。

龍黎の暖かさに包まれて、鮮花は安心してすっと目を閉じた。

それを見て瑛劉はわざとらしくため息をついた。

「……わかった。今日のところは勘弁してやる。龍王、ちゃんと俺の妃を宮へ返しておいてくれよ？」

「言われなくてもわかってるよ」

ぶすっと言い放つと龍黎は鮮花の肩を抱いて部屋を出た。

「まさか龍王の邪魔が入るとはな……ククッ、まったく、愛された姫君なこって」

瑛劉の独り言は誰に聞かれることもなく、虚空に消えて行った。

＊　＊　＊

「……どうしてあんなこととしたの？」

百合の宮の、鮮花の部屋。
何故か誰にも見つかることなく戻った鮮花は寝台に腰かけていた。
隣には龍黎が寄り添うように腰かけている。

「さっきも言ったよ。鮮花が怖がっているのがわかったから、って」
「答えになってないわ」
「本当だよ！　……でも、」

といったんそこで言葉を切る。

「シンディから鮮花は瑛劉の部屋に行った、って聞いたときなんかもやもやしたんだ……なんか僕、嫌だなって」

純真無垢、真っ白な龍王にあるはずのない、負の感情。
そのひとつが龍黎の中を渦巻いていたのだった。

「鮮花が怖がってるのがわかったってのも嘘じゃないよ。でも大体はそれ、かな……」
「龍黎……」

じっと、鳶色の瞳が鮮花を見つめる。

「ねえ、鮮花」

ちゅっ、と軽く龍黎は鮮花に口づけた。
みるみるうちに鮮花の顔は赤くなっていく。

「ちょっ、龍黎！」
「おやすみ、鮮花」

まるでいたずらが成功した子供のように無邪気に笑って龍黎は部屋を出て行った。

「もう、なんなのよ……」

わけがわからなくなって鮮花はそのまま寝台に顔を埋めた。
こんなときは早く寝てしまうのがいい。
何もかもを忘れて眠りに落ちようとしたが、龍黎の唇の感触が何故か消えず鮮花は寝台の上で悶えた。

（ちょっともう本当に、わけわからない！）

とりあえず今はどきどきとうるさい心臓を押さえつけなければならない。
結局鮮花が全てに疲れ果て眠れたのは、空が白み始めたころだった。

## 行間　守りたい、それだけ

そよそよと、眩い金色の髪が夜風に靡く。
腰までである緩く巻かれたそれと濃い赤紫の瞳を持つ、まあ所謂絶世の美女とやらが憂えた顔で嘆息する様はまさに絵になるものだ。
きっと男たちがこの近くを通れば、腰抜けになるのは間違いない。
彼女がふっと空を見上げると、そこには瞬く無数の星たち。

（これも、見納めか……）

自らが望んだことだった。
でもどこかで受け入れきれていない自分もいる。
この美しい星空を見ることか、それかこの大地で出来た仲間とやらに一生会えなくなることが嫌なのか。
それとも――心から信頼し、愛する彼の創る国に自分が一緒にいれないことだろうか。

「……こんなところにいたんだ」

人の気配がして振り向けば彼がいた。
相変わらず気配を消すのが上手だ、と彼女は笑う。
おっとりとした雰囲気で第一印象はあまりこの国の近辺では見慣れない顔つきだったということを、彼女は覚えている。
後から聞いてみたら彼の父親は海の向こう、極東の島国からこの地へ渡ってきたらしい。

「お前、寝てなくて良いのか？　明日お前がへろへろじゃ、皆の士気も下がるぞ」

「大丈夫だよ。それに、龍王殿がいてくれるだけでみんなは国を取り戻そうと戦ってくれるはずだ」
「言うな。恥ずかしい……では、私に何か用か？」
「用ってほどでもないけど……君と話したかったんだ」
と言って彼は彼女の隣に座った。
ちらりと見た極東の血が混じる彼の横顔もなかなか絵になるものだと、彼女は思った。
「私と話す？　お前はずっと私の隣にいたじゃないか」
出会ったときからそうだった、それこそ戦場でも。
戦場では常に彼と背中合わせだった。
彼は腕利きの良い旅の医官ではあったがそれと同じくらい剣の腕も立った。
「ははっ、そうかも」
「しかしきっと、明日で全て終わる。皆が望んだ平和な日がやって来るんだ」
「……そうだね」
彼は目を細めて小さな灯火器の灯りがぽつぽつと浮かぶ集落を見た。
あれは彼らの仲間たちが寝泊まりする野営地だ。
明日の最終決戦に向けてお互いを鼓舞しあっていたのが、遠い昔のように思える。
今はそんな仲間たちも明日に備えて思い思いに過ごしているだろう。
それから二人は何を話すでもなく、お互い空を見ていた。
その間にも野営地の灯りはぽつりぽつりと消えていく。
時々きらりと、流れ星が空を泳ぐ。

「なあ、」

不意に彼女が声をかける。
彼は返事をするかわりに顔を彼女のほうに向けた。
その表情はどこまでも、優しくて。

（やめてくれ、そんな顔をされたら、）

自分の決意が粉々に砕け散ってしまう。
彼と共に戦った数か月、何度自分の運命を呪ったかはわからない。
何故自分は龍王として生まれてきてしまったのか。
そして、ずっと考えていたこと。
どうすれば彼が創るであろう国が未来永劫、平和に栄えるか。
意を決して彼女はその提案を口にした。

「……明日、戦いが終われば……私をアレと一緒に封じてくれないか」
「なっ……何言ってるんだ！　君正気！？」

彼の瞳が驚きで見開かれ、彼女の肩を掴む。

「私は至って正気だ……聞いてくれ、真面目な提案なんだ。アレを私と一緒に封じれば私の力でアレを半永久的に閉じ込めておくことが出来る。それに私を封じればお前が創る国をずっと守ってやることだって出来る。それこそ、お前が死んでも」
「っ、でも……何度も言うけど僕、国なんて……」
「お前が創らなくてどうする！　……私たちは明日この戦いに勝つ、しかし勝てば今の王政は崩壊する。民を率いることが出来るのはお前だけだ」
「それは君がいてくれたからで、」

「何を言っている。私や私の後の龍王はずっとお前を守るさ。お前だけじゃない、お前の子孫たちも。私には視えるんだ」

そう言うと彼女は静かに目を閉じた。
瞼に映るのは彼と出会ってから過ごした日々。
そしてきっと脈々と続く彼の子孫たち。
彼女は彼を心の底から信頼し、愛していた。
何度彼の隣にいたいと願ったか、でも自分は龍王、彼は人間。
共に生きられるわけがない。
ならばせめて彼の国と、彼の子孫を守りたい――

「……後悔、しない？」
「するわけないだろ」

本当は心のどこかでちょっとだけ、未練を残してはいるけれど。

（少しくらい心残りがあったっていいじゃないか）

彼女はふっと笑って彼の手に自分の手を重ねた。
きゅっと、優しく力をこめる。

「私はずっと、お前を守るから――慶桜」

＊　＊　＊

蝋燭の光だけがゆらめく書庫。
ぱたん、と音をたてて誓牙は分厚い本を閉じた。
黄色く変色した紙と染みのついたこれまた厚い表紙が、その本の歴史を物語っていた。

「……」

誓牙は無言で何も書かれていない表紙を見つめる。
これは誓牙が幼い頃、鮮花の父親である笙華治から賜ったものだ。
そもそもこの本は笙家に代々伝わる本で、笙慶桜と龍王に纏わる伝説の『真実』が書かれたものだ。
そんな大切な本を華治が何を意図して誓牙に託したかはわからない。
しかも全編古代文字で書かれているため誓牙が解読出来たのはほんの一部だけ。
ただ、改めて読み返してみると何かが引っかかる。

「アレ、とはなんだ……？」

それに対応するであろう章を解読しようと何度か試みたものの、あまりにも難解な文字と文法が使われていたり、染みで読めたものじゃなくなっていたりする。
完璧に彼が読めたのは恐らくアレとの決着がつくであろう日の前夜の部分のみ。
それ以外はぽつぽつと、本当に一部ずつしか読めない。

（せめてこの章の前後を読むことが出来れば……）
「誓牙殿？　何をしていらっしゃるのですか？」
背後から急に声をかけられ、誓牙は一瞬どきりとした。

振り返ると金色の髪を揺らめかせたシンディがいた。
「いや、特に何も。本を読みふけっていただけだ」
「そうでしたの……あら、古そうな本ですわね」
「貴様には関係なかろう」

ぴしゃりとそう言い放って誓牙は書庫を出た。
シンディの不服そうな顔が見えたが誓牙には関係ない。
何故か誓牙はシンディが苦手だった。
苦手、というよりも――生理的に受け付けない。
王宮に来てできた同僚はみなシンディのことを美しいと言うが。

（この本に出てくる龍王のほうがずっと美しいだろう）

笙慶桜に仕えていた美しい金色の龍。
まあ、それでも鮮花には敵わないだろうが。
妙なところで鮮花馬鹿精神を発揮して彼は部屋に戻った。

## 蝋梅の宮　（一）

瑛劉を先頭に鮮花たちは華渓の北側にある通りを歩いていた。
無意識にであろうが、鮮花は瑛劉と少し距離を開けている。
先日無理矢理抱こうとしたのだから無理もないと思うと同時にぴったりとその鮮花の隣を歩く龍黎の姿に、瑛劉は嫉妬のような感情を抱いた。

（あの龍王は一体……）

どうやら自分は思った以上に鮮花に入れ込んでしまっているらしい。
幼い頃出会った女性――凛明の面影を彼女に見ているからか。
瑛劉は自嘲するかのようにふっと笑った後、笑みを消して真っ直ぐ状況を見据えた。
あの日、謁見の間の窓から見た光景も酷いと思ったがこうやって間近で見るともっと酷かった。
道の舗装はもうぼろぼろ。
建物は今にも崩壊しそうなくらいどれも傾いてしまっていて、辺りにはたくさんの人が座り込んでいる。
お腹が空いたと泣き叫ぶ子供、病気だろうか苦しそうに呻く老人。
その人たちは皆、やせこけていた。

「……こんなことになっていたなんて」

鮮花は目を背けたくても背けられなかった。
自分が知らないところで、こんなことになってしまっていた。
この人たちはこんなに苦しんでいるのに自分はのうのうと暮らしている。

その心情を察したのか龍黎が鮮花の肩を抱く。
その腕には力が籠っていて、龍黎も龍王なのにこの状況を知らなかったことが悔しいのだと言うことが察せられた。
刹那、鮮花の視界に黒いものが映る。

「っ、あれは……？」
「……正体はわからん。だがあれがきっとここを穢す源だ。俺はあれを『黒きもの』と呼んでいる」
「黒き、もの……」

小さくその言葉を口の中で反芻すると何故かぞっとした。
目をこらして見れば、このあたりは黒い靄のようなものが蠢いている。
あれが黒きもの、なんだろうか。

「それで僕は何をすればいいの？」

鮮花を抱いたままの龍黎が先頭を歩く瑛劉に問いかける。

「龍王は邪なものを浄化する力があると文献に書いてあった。だからといってここら一帯を一気に浄化するのは不可能だろう……とりあえず、浄化出来そうなものから少しずつやっていってくれ」
「私と瑛劉は？」
「俺たちは一応、慰問という形でここを訪れている。民を励ましてやればいい」
「……わかったわ」

励ますと言われてもこの状況で何を励ませと言うのか。
鮮花の率直な感想はそれだった。
その時、こちらに向けられている視線に気づく。

「ねえ……あれってもしかして……」
「主上だ……どうしてこんなところに……」
「主上だ、主上だ」
「でもどうせ助けてくれないわ」

ぼろぼろの着物に痩せこけた身体。
見るところ恐らくこの付近に住む民だろう。
『どうせ助けてくれない』、その言葉に鮮花の胸はつきんと痛む。

（私だって助けてあげたいのに）

そんなことをぼんやりと考えていると不意に小さな影が現れ鮮花に縋り付いた。
その勢いと力に一瞬鮮花はよろめいた。

「な、何！？」
「貴様、鮮花様から離れろ！」
「お願い！　あなた『おうぞく』なんでしょ！？　お母さんを助けてよ！」

影の正体を見れば埃や汚れで全身真っ黒になった少女だった。
その背格好に鮮花は葵家の近くに住む愛鈴の姿を重ねた。
しかし瑛劉は少女に現実的な言葉を投げかける。

「確かに俺たちは王族だが医官ではない。貴様の母親は助けられん」
「でもわたし聞いたことあるもん……龍王様のお力を持つ『おうぞく』がお母さんを治してくれるって」
「……貴女のお母様の様子、聞かせてもらえる？」

しゅんと俯く少女に鮮花は優しく尋ねた。
龍王とて病気は治せない、しかし少女の聞いた『龍王が治してくれる』という話が本当だったとしたら……
「お母さんの周りにはね、ずっと黒い影みたいなものが動いてるの。そのせいでずっとお母さんは苦しんでて……」
「きっと黒きものの仕業だよ」
冷静に答えたのは龍黎だった。
「鮮花、瑛劉、この子についていこう。僕はこの子のお母さんを治したい」
「……わかったわ」
同意を求めるように瑛劉を仰ぎ見ると仕方ないなといった表情で頷いただけだった。

＊　＊　＊

「っ……これは……」
「酷い……」
少女に手を引かれ一行が来た少女の自宅は、もうそれは酷い有様だった。

まず外から見ただけで黒きものに相当侵食されているのがわかる。
中に入ると尚更だ。
外は明るく窓だってついているのに家にはまったく光が差し込まない。

「お前、よくこのようなところに住んでいられたな」
「ううん……わたしは別のところに住んでるの。お母さんが『貴女は出て行きなさい』って言ったから……」
「それでも毎日ここに来てるんだね」
「うん、だってお母さんが心配だもん」
「……あなた、強いのね」

母親を心配する少女の姿を鮮花はふっと目を細めて見た。
白百合の君が倒れたとき、鮮花は毎日母を見舞った。
しかし原因不明の病である母に対して出来ることと言えば見舞うことだけで、日に日に弱っていくのを見ることしか出来ず自分の非力さに嘆くことしか出来なかった。
ところが目の前の少女はどうだろう。
母親を助けるために奔走し今こうして鮮花たちを見つけた。
少なくとも自分よりずっと何倍も強い、そう鮮花は思った。

「お母さん！　『おうぞく』の人たちを連れて来たよ！」

とある一室の寝台に少女の母親は横たえられていた。
その部屋はこの家のどこよりも「黒きもの」の気配が濃く、どこよりも暗い。
仰向けに横たわる母親の顔を覗き込むと瞳は開ききり焦点があっておらず、虚空を見ているだけ。
肌もまた病的なほどに青白かった。

「……これは余程重症ですね」
「うん、精神まで黒きものに食い尽くされちゃってる。生きてるのが不思議なくらいにね」
誓牙の呟きに医官の如く冷静に返事をしたのは龍黎だ。
龍黎は寝台の前に膝をつき母親の手を取った。

「治せるの？」
不安げに、少女が尋ねる。
「治せるよ。だって僕は、」
龍王だから。
それを聞いた少女の目が驚きで見開かれるのと、握った手から光が溢れだしたのは同時だった。
光は瞬く間に母親を包み込み黒きものをすべて浄化していく。
鮮花がはっと我に帰ると相変わらず部屋には黒きものの気配が充満していたが、目の前の母親に憑いていた黒きものは綺麗さっぱり浄化されていた。
ゆっくりと母親の瞳が開かれる。

「っ、お母さん！」
「……甘藍（かんらん）……？」
「お母さん……、お母さん……！」
母親が少女の名を呼ぶと少女は母親に抱きついた。
母親も自分の身に何が起こったのか理解していなかったが、次第に状況がわかってくると上体を起こし少女を抱きしめ返した。
二人は目に涙を浮かべていたがその表情は笑顔で溢れていた。

龍黎を見るとどこか誇らしげな顔をしていた。

＊　＊　＊

自身を助けたのが王族だと知るや否や母親は地面にめり込む勢いで頭を下げ感謝の言葉を述べ続けた。
それでも頭を上げようとしなかったので最終的には瑛劉が無理矢理上げさせたのだが。
鮮花たちは母親に一言断り、この家の黒きものを全て浄化することにした。
と言っても浄化出来るのは龍黎のみ。
彼に負担をかけさせるわけにはいかないので、害があると判断した大きいものだけ浄化していくという形で進めていた。

（これ……）

鮮花が見つけたのは花瓶に活けられた花だった。
これもまた黒きものに穢され黒い靄が花の周りを漂っていた。

「可哀想……龍黎に浄化してもらったほうがいいわよね」

自らも花そのものの名を持つからか鮮花は悲しい気持ちになり、まるで慰めるかのようにそっと花に手を近づけた。

「っ！？」

何の前触れもなく突然だった。
刹那、鮮花の指先からぱあっと光が迸ったかと思うと瞬く間に花瓶ごと花を包み込み次の瞬間に黒きものの穢れは浄化されていた。

「どういうこと……私が浄化、した……？」

黒きものの浄化は龍王である龍黎にしか出来ない。
でも確かに今、普通の人間でしかない鮮花が黒きものを消した。
わけのわからない恐怖で鮮花は思わずぎゅっと自分の指先を握った。

「鮮花様？　如何かされましたか」
「っ、なんでもないの、ただ私の気のせいだったみたいで」
「……その後ろの花」

誓牙の言葉に鮮花の肩がびくんと大きくはねる。
こんなに黒きもので穢された家の中でこの花だけが綺麗なままでいるのを不思議に思ったのだろうか、ひょっとしてばれるのでは、と鮮花は怯えていた。

「とても美しい菊の花ですね……その花言葉通り、黒きものの中でも清いままでいれたのでしょう」
「そ、そうかも……誓牙！　向こうのほうも見よう！」

そう言って誓牙の手を引き無理矢理その場から離れさせた。

（でも、どうして……）

鮮花がいた場所には、黒きものの中でも清く輝く、黄色の菊だけが残っていた。

## 蝋梅の宮　（二）

結局あの後、鮮花は家の中のいろんなものに触れてみたがそれらが浄化されることはなかった。

（気のせい、だったのかなあ……）

でもそんなはずはない。

確かにあの時触れた花は神々しい光と共に浄化されたはずだ。

その光景だけはしっかりと、鮮花の脳裏に焼き付いていた。

「葵貴妃様？　どうかなされたのですか？」

「あ……なんでもないの。それより美味しいわね、この花茶」

「これはシルキアードから取り寄せたものなんです。そう言って頂けるとなんだか嬉しいですわ」

と言って目の前のシンディは笑った。

町から戻った後、百合の宮の庭で鮮花たちは午後の茶会をしていた。

とは言っても瑛劉は公務で忙しく、ここにいるのは鮮花と龍黎、給仕でいるシンディだけなのだが。

「誓牙はどうしたの？」

「先ほど書庫に入られるのを見ましたわ……最近よく書庫におられるようで」

「誓牙は昔っから本が大好きだったから」

そう、王宮にいたときからずっと。

葵家にいたときも自分の為に買うものといえば本ばかりだった。

そう言えばと鮮花は思い出す。
誓牙がまるで宝物のように大切にしていた古びた本を。
一度だけ誓牙に内緒で中を見てみたが、鮮花には到底理解出来ない古代文字の羅列ですぐに閉じた。
ひょっとしたら誓牙はあれを読もうとしているんじゃないか。

（まさか、ね）
「本、と言えば葵貴妃様はご存知ですか？」

いつものようにシンディが明るい調子で話をする。

「何を？」
「今は使われていないんですが、蝋梅の宮にはとても珍しい古書があるそうですわ。誓牙殿に渡したらお喜びになられますわ」
「へえー。君は取りに行かないのかい？」
「それが主上は誰もあの宮に入れたくないらしいので……兵まで門番につけておられるのです。でもきっと葵貴妃様なら入れていただけますわ」
「そうなんだ……ねえ龍黎、ちょっと行ってみない？　珍しい本があるなら誓牙にも教えてあげたいし」
「僕は鮮花の行くところならどこまでもついて行くよ」

へらりと笑ってまた骨まで溶けそうな台詞を龍黎さらりと言い、未だ慣れない鮮花はいちいち顔を赤くするのだった。
そして龍黎はそんな鮮花を見て可愛い、と内心思いへらりとした笑みを深くする。
二人ともそれにばかり集中していて気がつけなかった。

――シンディが口角を上げ、にやりと笑っていたことに。

＊　＊　＊

鮮花はシンディの情報をいちいち疑うことはしなかった。
蝋梅の宮。
離宮のひとつであるその宮に昔住んでいたのは他でもない鮮花の兄・笙柳輝（しょう・りゅうき）だった。
そして柳輝の趣味は読書と古書集め。
珍しい本にも興味を持っていた人物だったため蝋梅の宮にそれらが残っていてもなんら不思議ではない。

「……そうだったんだ。その鮮花のお兄さんって、どんな人だった？」
「どんな人って……小さかったし兄上だって忙しかったからあんまりよく覚えてないけど……でもあの日、真っ先に私を助けてくれた」

鮮花は自分の手を見る。
笙家没落のあの日、この手よりもずっと小さかった自分の手を握って百合の宮から連れ出してくれたのは柳輝なのだ。
不器用だけど、とても優しい兄だった。
そんな気がした。
鮮花のその表情を見て、そっと龍黎は目を閉じた。
龍黎は柳輝が殺された現場を知っている。
見ていながらも助けられなかったのだ。

それは柳輝だけじゃない、鮮花の世話を焼いた女官も、よくしてくれた文官も、そして鮮花の父も。

（だから、鮮花は僕が守るんだ）

ぎゅっと、龍黎は自分の手を握りしめた。
まるで鮮花のことを想っていた者たちに誓うように。

そうこうしているうちに二人は蝋梅の宮まで来た。
蝋梅の宮は百合の宮とは構造が違い、塔のような作りになっている。
中心は確か吹き抜けになっていてそれを囲むように螺旋階段がついていたはず、と鮮花は朧気な記憶を手繰り寄せた。
それにしても、

「龍黎、シンディは見張りがいるって言ってたよね……誰もいない」

扉の前に立っているはずの兵はどこにもいない。
それどころかこの宮の周りだけ人の気配が全くしないのだ。
逆に宮から発せられる、禍々しい気。

「この気……黒きものだ、しかも町のよりも強い」
「黒きもの！？　どうしてこんなところから……」
「入ってみよう、鮮花」

鮮花は頷き、扉の取っ手に手をかけた。
そこから流れてくる黒きものの気に鮮花の額に脂汗が浮かぶ。
勇気を振り絞り、鮮花は一気に扉を開けた。

## 蝋梅の宮　（三）

鮮花の記憶通り、蝋梅の宮の中央は吹き抜けとなっていた。
主がいない今、久しく使われていない宮は薄暗く光源は窓から入ってくるものだけ。
その上、黒きものによる陰鬱な空気が宮を満たしていた。
鮮花と龍黎が宮に入ると、吹き抜けの中心で椅子に腰かける男がいた。
俯いているからか男が何者なのかはわからない。

「ここの黒きものの気、あの人が発してる」
「そんなことってあるの！？　人間からだなんて……」

にわかには信じ難い話である。
先ほどの町では黒きものは全てヒト以外の物体から発せられていた。
人間からそれが放たれている、ということはその人間自体が黒きものに侵されているということだ。
まるであの母親のように。
しかしあの母親は侵されているだけで黒きものを発してはいなかった。
恐らくそこまで侵食が進んでいなかったのだろう。

「……ちょっと待って、あの人」

違和を感じた鮮花は確かめるように一歩ずつ、黒きものの中心となってしまっている男に近づいて行った。

「危ないよ！　鮮花！」

龍黎も鮮花から離れないように彼女について一歩ずつ近づく。
何かあればすぐにでも鮮花を守れるようにしなければ。
男とあと一間くらいの距離まで来たとき、ひゅっと鮮花は息をのんだ。

「嘘……そんなはずは……！」

黒きものを発しながら椅子に腰かけ俯く男。
その男に見覚えがあった。
鮮花の記憶の中の姿とは変わってしまっているが、それでも一生忘れることが出来ない男の名は、

「皇、凱世……！！」

――父親の右腕とも呼ばれたかつての臣下であり、仇でもある男だった。

「何だって！？」
「どうして……二年前に死んだはずじゃ」

そう考えてもいたずらに混乱するだけ。
皇凱世は恰幅の良い、がっしりとした正に武人と言える体格の男だった。
しかし今目の前の凱世は武人としての風格はおろか、やせ細り見える手の甲には皺が刻まれている。
男が凱世だと判断出来るのは最早面影のみ、と言ったところだ。
その凱世は二年前、突然病に罹り亡くなった。
無論その報せは王族としての生活から遠く離れ、下流貴族として生活している鮮花の耳にも届いていた。

だから凱世の息子である瑛劉が慶桜国の王に即位したのだ。
なのに、何故。
すると突然ぴくん、と凱世の身体が跳ねた。
「気をつけて、この人まだ息がある」
龍黎は鮮花を守るように一歩前に進み出た。
ゆっくりと凱世の顔が上がっていき、鮮花を凱世を生気のない瞳で見据える。
「誰、ダ……」
「……貴方は皇凱世なの？」
「……」
男は何も答えない。
恐らく誰だという質問にしか答えないつもりなのだろう。
「……葵貴妃と、王宮では呼ばれているわ」
鮮花はあえて今の自分の位を名乗った。
いつか千花姫の命を狙った男だ、迂闊に名乗れば襲ってくるかもしれない。
「貴妃……アイツノ……助ケテ、ク、」
しゅっ。
刹那、鮮花の横を黒い影の剣が掠め、はらりと鮮花の髪が数本宙に舞った。
凱世が言い終える前に彼に憑いていた黒きものが宿主を守ろうと動き出したのだ。

「きゃあっ！！」
「鮮花！！」
咄嗟に龍黎は鮮花を抱え蝋梅の宮の出口目指して走り出した。
その間にも影の剣は正確に鮮花に狙いを定め襲ってくるが、龍黎もまた器用に鮮花を抱えたままそれを避ける。
（やだ……！）
次々と襲い来るそれに「あの時」と同じ死の恐怖を感じ鮮花は龍黎の胸に顔を埋めた。
それに気がついたのか龍黎は鮮花を抱える腕の力を強めた。
「大丈夫だよ、今度はちゃんと僕が守るから」
「えっ……？」
今度は、の言葉の意味を理解するより先に宮の出口まで着いた。
龍黎は鮮花を降ろし、周りに光の結界を張った。
すると影の剣が結界に当たり次々と姿を消していく。
「早く！　扉を開けて！」
「っ、ちょっと待ってっ……開かない……なんで、」
ここに来たときは普通に開いたはずの扉が全く開かない。
鮮花にかわり龍黎が両開きの扉を引いたがびくともしなかった。
そうしている間に光の結界の強度は弱くなって罅が入り、遂に一本の影の剣が結界を破いた！
「くそっ……もう一回、」

「いやあっ！！　龍黎！！」

鮮花の悲鳴にはっと龍黎が振り返ると影で出来た鞭のようなものに捕われた鮮花が目に入った。
みるみると、怒りで龍黎の頭に血がのぼる。

「鮮花！！　ッ……よくも……ううっ」
「龍黎！！！！」

龍黎は自分の身に何が起こったかわからなかった。
影に四肢の自由を奪われたままの鮮花が目を見開いてこちらを見ている。
が、次の瞬間背中に走った衝撃で全てを理解した。
反撃に出ようとしたその時、足止めをするかのように飛んできた影の剣が龍黎の腕に突き刺さり、更に剣の衝撃で後ろまで吹っ飛ばされ壁に縫い付けられたのだ。
じくじくと、龍黎の血が彼の衣服を汚していく。

「っ！！」

影に引っ張られ、鮮花は黒きものの中心、凱世の近くまで来てしまった。

「凱世、何が目的なの！？」
『力ヲ持ツオ前サエ取リ込メバ、コノ国ヲ我ガ手中ニオサメルコトガ出来ル！！』

聞こえてきた声は先ほどのように凱世から発せられたものではなく、直接脳に流れ込んでくるものだった。

「黒きものが意志を持ってるって言うの……うぁっ、」
『サア、我ニ命ヲ差シ出スノダ！！』
「ぐっ……ああっ！」

するすると影は伸び鮮花の首を絞める。
四肢は抑えられ抵抗することも許されない。
視界の端には壁に縫いとめられた龍王の姿が映っていたが、それもだんだんと白く霞みがかり鮮花の意識も遠くなっていく。

（私、死んじゃうのかな）

黒きものから慶桜国を救うと決めたのに。
志半ばでもうあの世に逝ってしまわないといけないのか。
もう酸素が取り込めなくなっていくとき、ふと鮮花の耳に哀願の声が響いた。

「助ケテ、クレ……」

ああ、これはきっと凱世の声。
彼はきっとずっと黒きものに取りつかれてきた、恐らく見かねた瑛劉と李鴻が蝋梅の宮に幽閉したのだろう。
凱世の声からは悲しみと先の王に対する贖罪が感じられた。
でも、鮮花には彼を助ける方法がわからない。
許せと言うのか、仇に対して。
しかしきっと凱世はそれを悔いているはず、だから、

（私が、許します。だから、）

――もう、誰も傷つけないで。
薄れゆく中、鮮花は手を伸ばしそっと凱世の頬に触れ、意識を手放

した。
どこか遠くで龍黎の叫びが聞こえた、そんな気がした。

＊　＊　＊

「鮮花ーーーー！！」

叫びも届かず、次の瞬間龍黎が見たのは影に縛られたままぐったりと意識を手放した鮮花の姿だった。
四肢と首にすでに力はなくだらんと垂れ下がっている。

「そんな……鮮、花……」

鳶色の目に浮かぶ涙は剣の刺さった腕からどくどくと血が流れる感覚に対してのものなのか、はたまた主を失ったことに対してか、そのまま龍黎は項垂れた。
鮮花を、守ってやることが出来なかった。
彼女を守ると、彼女と彼女の父親に約束したのに。
ただただ自分の無力さが情けなかった。
が、その時龍黎を縫いとめていたものの気配がふっと消えた。
何事かと腕を見ればそこに影の剣もなければ、何かが刺さっていた痕跡もない。
先ほどまで彼を苛んでいたもののひとつである痛みも嘘のようにない。

「何が……」

はっと前を見れば、鮮花が凱世に触れた部分を中心に全てが光の粒となり消えていく。
周りに充満していた黒きものの気も浄化されていっているようだ。
影たちを見るとその力を断ち切られたのかしゅるしゅると収縮し、新たな力を求めて窓から出ていくのが見えた。

（今ならやれる）

そう確信した龍黎の姿は消え、代わりに美しい蒼の龍がその場に現れた。
蒼の龍は未だに意識を失っている鮮花を影から解放し背中に乗せた。

『はあああああ！！』

龍黎は力を解き放ち、未だしぶとく鮮花にとり憑こうとしている黒きものを浄化した。
彼から発せられた光は蝋梅の宮を包みこみ、それが収束したとき最初に来たときの陰鬱さが嘘だったかのように、蝋梅の宮は元通りの明るい空間となっていた。
それを見届けた後、龍黎は光とともに人間の姿に戻った。
腕の中にいる鮮花がちゃんと息をしているのを確認したとき、ほっと彼は息をついた。

「良かった……でも、あれは……」

龍黎の脳裏を掠めたのは先ほどの光景。
鮮花が触れた部分から黒きものは浄化されていったのだ。

本来、浄化の力は龍王にしか使えないもの。
それが使えるということは……龍黎はひとつの可能性に辿り着く。

「鮮花に龍王の力が……？」
「そこで何があった！！」

思考の海に入ろうとした龍黎を呼び戻したのは、驚いた顔で扉からこちらを見る瑛劉の姿だった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3701r/

花の名は

2011年10月13日01時54分発行